

「僕の方には、今其様に急いで書くものもないんです。もし昔かなきやならない事でも起れば、玄關でも書けるですから、其様斟酌は無用です。母さんに話して見て下さい。」

「其様に仰有つて下さいますから、母へ話して見ますけれども。」

「貴女が僕に遠慮する事は無いんです。」

「ちやア、話してまいります。」

美都子は鐵三の枕頭へ行つて、千代乃とお瀧とへ話すと、二人も出来るなら然様爲たいと思つて居たところだから、お瀧は直ぐに座敷へ行つて、

「先生が御迷惑なされる様ですと願へませんけれども。」と云ふ。

「迷惑も何も云つてるところではありません。醫師の出入にも便利ですし、風通は好し、直ぐ御移しなされるが可いんです。机ですか。机は彼隅に置けば可いでせう。尙ほ邪魔になる様な場合には、玄關に持つてく事に爲ます。」

「難有う御在ます。何卒よろしく。」

勝彌が手早く机書函などを一隅に片付けると、美都子が其跡を掃く。千代乃が鐵三を懷

いて来る、お瀧が布團を抱えて来る、今迄の書齋は忽ち病室に變つて了つた。

其所に元二が歸つて来て、醫師は今廻診中にて留守なりと云ふ。

「代診も居なかつたかね。」

「代診も今出掛けることでした。」

「では、誰も来ないんだね。」

「直ぐつて云ふんぢやア困るつて云ふんです。」

「怪しからん奴だね。」

「馴染でないから、輕蔑してゐるんです。」

「輕蔑してゐるつて。失敬な奴だ。其様奴には診察料を擲付けて遣るが可いんだ。」

元二は苦笑を爲る。

「此様時に兒玉さんでも来て下さると、可いだけども、ど、お瀧が云ふ。」

「兒玉ですか。さやう、彼でも素人より勝かも知れない。は、は、は。」

勝彌が覺えず笑つた時、格子戸が開いた。

「父さんかも知れない。」と、元二が云ふ。

「御醫者さんかも知れないよ。美都ちゃん、行ッて御覽。」

母の命に美都子が玄關へ行ッて見ると、既に障子の内に入ッて居たのは兒玉權二だ。

「母様、兒玉さんが入らしッてよ。」

「さうかい。丁度好かつた。此處へお連れ申してお呉れ。」

權二は座敷へ入ると、人々の光景に、鐵三が病氣で而も重體らしいのを見て取り、眉を

擡めながら先づお瀧に對ひ、

「鐵ちやんが如何か爲すッたんですか。」

「急性の肺炎だとか申しましてね。」

「そりや不可ですな。」

兒玉は直ぐに醫師らしく容體振ッて鐵三の枕頭に坐ッた。

千代乃やお瀧は兒玉が何と鐵三の病氣を見るかと、氣遣はしさうに其面を目成るのであつた。

「鐵ちやんが斯様だと思へば、昨日にも伺ッたんですのになア。元二君、君一寸知らせて呉れ、ば可いちやアないかね。」

權二は不平らしく云ふ。元二は何とも答へぬ。お瀧は心強い様な氣がして嬉しく、

「貴方にお願ひ申したかつたんですけれども、御遠方の處をと思ひましてねえ、つい御遠慮申したので御在ますよ。」

「遠慮したんですッて。」と、一層不平らしい顔を爲て、「遠慮なさるのも事に依るですよ。

鐵ちやんとは僕も馴染なんだから、知らして下されば、夜中だッて飛んで來るんでしたのになア。」

「貴方の事ですから、來て下さるとは思ひましたけれども……母さま、兒玉さんに御診察を願ひませうか。」とお瀧は千代乃の意嚮を氣遣つた。

千代乃は平素から權二を好まないけれども、可愛き孫の重病に氣がはらくして居るので、無論素人とは違ふ權二に診て貰ッたら、或ひは其診断が存外確かで、安心のなる様な能い處法があらうも知れぬ。野夫にも功の者ありと云ふ聲さへある、診て貰ふに勝した事

は無いと思ふ。

「それはお願ひ申すが可いよ。」

「兒玉さん、御面倒でも御診察下さいませんか。」

「自分の天職を盡すのに、面倒なんて事はありません。前に診た醫者は肺炎と云つたんですね。」

「さうです。それも、餘程重體だから、氣を附ける様に申されました。」

權二は首肯しながら鐵三の枕頭に馳寄り、凝乎と其睡顔を見て、

「胸を開けて戴きますか。」

お瀧は靜かに鐵三の附紐を緩めて、其胸のあらはになる迄襟を寛げた。

元二は冷かな笑を浮べた。勝彌は熱心に見て居た。千代乃と美都子は何と診断るかど氣遣はしく眉を擡めて、おどくして居るお瀧と共に、一心になつて權二の顔から眼を放さなかつた。

權二は容體振ながら、睨から唇、胸の打診、手拭を胸に當て聴診までを了つたが、其顔

色には安からぬ色が見えて、深く眉を擡めて考へて居る。

千代乃とお瀧と美都子の眼は、や涙合れた。

「貴方の御診断も、矢張肺炎で御在ませうね。」

お瀧が問ふと權二は太息を吐いて、

「さうです。而も餘程重體で、もう手後になつて居るですね。せめて、一兩日以前に拜診して居たら、何とか手段があつたかも知れないですけれども、」と、語を斷る。

今權二が云つたほどの悲き宣告を、未だ聞かされて居なかつたので、千代乃とお瀧美都子の婦人連中は、餘の事に涙の眼を睜るのみだ。元二も有聲に不安の眉を擡せた。

「兒玉君、今となつては、既に手段が無いと云はれるんですか。」

「さうです。何を云ふにも體が此ですから、此高熱に勝られんですね。それに肺の方も…御氣の毒ですなア…何しろ今明日が餘程危険だらうと思ひますな。」

「其様に重體んですかねえ。」と、お瀧ははらくと涙を零す。

千代乃は顔に袖を當て、美都子の眼には一杯の涙である。

昨日から病室に爲た座敷で呷いて居る人の聲が、勝彌の耳に斷續ながら入る。それは、重勝とお瀧で、折々元二の聲も其に加るのである。

「僕は御免だ。先生に面目なくって、其様事が話せるものか。僕には話せないから、母さんが話すが可いんだ。」

「其様事をお云ひだして、此場合如何にも詮方が無いぢやアないかね。」と云ふのはお瀧で、「お前さんが御話爲てお呉れでなきやア、如何にも斯にも爲様が無いんだよ。」

「いやだよ。僕は何てツたツて御免だ。父さんと母さんとで爲たんだから、二人で御話するが可いんだ。僕にはとても其様鐵面皮な事は出来ない。不時の準備の爲だツて銀行に預けて置いたのが、今更ありませんからツて話せるか話せないか……僕は何てツたツて御免だ。」

「御免だと云へば、其で済む意だな。」と云つたのは重勝。

「済むか済まないか知らないけども、何も僕の關した事ぢやないでせう。父さんや母さんが山氣があるから、此様事になつたんぢやありませんか。其失敗の云譯を僕に爲せようたツ

て、いくら親だツて然様行くもんですか。僕は御免だ。」

「母さんが此様に頼むのに可厭だとお云ひのなら誰方が無いさ。もう御前さんには頼みませんよ。鐵坊が夜中から此様に悪くお成りだから、もしもの事があつた時に、魔誤付かない様にと思ふんだけれども……これも此兒が不運なのさ。」と、お瀧の聲は涙に曇って、鼻汁を啜る音をさせた。

勝彌は三人の談話をきれくりに聞得たので、確と斯とは推定しかねたけれども、銀行に預てある準備金に異状があるらしい事だけは悟得た。此様な事があるべき筈では無いけれども、きれくりに聞得た元二の語の中に、父さんや母さんが山氣があるから此様事になつたと云つたのが、強く耳に響いて、凡の事情が想像し得られるのである。殊に、夜中から鐵三の容體が、一層悪くなつたと云つたお瀧の語を思合せると、斯して暢氣に寝て居べきではないと、夜具を蹴て起上つた。

勝彌が夜具を喚び音を聞付けて、美都子が來て彼方へ運んで呉れた。

「美都子さん、鐵ちやんの容體が良くないんですか。」

「さう。直ぐ派合ひ。」

「醫者は呼びに遣つてあるんですか。」

「はい、もう見えます時分ですけれども……。」

「彼醫者は不可ね。迎に行つても直ぐに來て呉れん様だし、如何にも不親切だ。元二君に今一度行つて貰ツちや如何です。」

勝彌が茶の間に來て見ると、千代乃は火鉢の傍に悄然として坐つて居た。其前には長夫が新聞紙を讀んで居た。

「大變寝忘れて了ひました。」

勝彌は千代乃に斯う云つて、次いで座敷を差覗き、

「元二君、今手が明いてるなら、一寸來て呉れたまへ。」

勝彌が顔を洗に臺所に行くと、元二は其後から尾いて來た。

「君、裏へ出よう。」

勝彌は元二を誘うて裏へと出た。

「元二君、何か困難な事情が發つたんぢやアないかね。此は單に僕の想像なんだがね、君の父さんや母さんが御困りの事が發つてやせんかね。」

元二は勝彌に斯う問はれると、穴にも入りたいたい様な氣がする。元二も今朝までは知らなかつたのだが、何時の間にか、不時の準備として銀行に預てあるべき筈の二百圓は、其影さへ残らぬまで消費されたと云ふのである。それは父と母との例の山氣の犠牲になつて了つたので、其内五十圓は長夫の爲に浪費されたと云ふ事である。のみならず、勝彌から其宿料として、此月の初旬に入れた三十金、及び其前から餘分を受取つてある殘金までも、總て消費されて了つて、實は明日の飯米の料にも窮して居る始末、況て旦夕に迫つて居る鐵三の命數が盡きた曉には、其葬式の費用を如何にすべきか、重勝とお瀧が差當つて痛心して居るのは此で、二人が相談の結果、元二をして勝彌に説かしめて、手段を講じて貰はうと云ふのであつたが、元二は自分には其様事は出來ない。久能木先生と彼様に堅い約束を爲て置きながら、無斷で銀行の預金を消費して了ひ、困るからと云つて直ぐに先生を煩はすなぞとは、如何にも先生を馬鹿にした話で、自分は其相談は斷じて御免を被ひる。第一先生

に其様事を云はれた義理でない、両親が何と勸めても元二は断じて應じ無つたのである。であるから、今勝彌に問はれても、元二は何と返辭の爲様もなく、唯垂頭して居た。

「元二君、僕に遠慮する事は無いよ。何様事情か知らないが、何とか相談の爲様が無い事も無いだらう。とにかく隠さないで、話して呉れては如何かね。」

勝彌は楊枝を使ひながら、幾平と元二の顔を見た。

元二は云ふのが辛くてならぬ。勝彌の事だから、有の儘を話せば、必ず其手段を講じて呉れるに違ひないけれども、此迄幾度となく其助力を仰いで居ながら、今また此様事を話すのは餘り其好意に狎れ過ぎる様で、勝彌の思惑も羞かしい。と思ふから話し得ないで、尙ほ垂頭して居た。

「元二君、君何故黙つてるのかね。君は何か、久能木に話しても駄目だ、共に謀るに足ぬと思ふのか。」

「そ、其様事が、其様事が先生あるもんですか。先生に御話しても駄目だ、共に謀るに足らんなんて、其様事が、其様失敬な事を僕が思ふものですか。唯僕は御話するのが辛いん

です。御話爲たいと思つても、餘り何ですから僕には、僕には御話が出来にく、つて……僕は此様辛い事は、今まで覺が無い位です。」

「君の意中は察してゐる。けれども、僕になら話しても可いだらう。君の今の語で察すると、僕へだから尙ほ話せないで云ふ意味にも聞える様だ。けれども、僕と君との關係を考へちや如何かね。君と僕とは殆んど兄弟、義理のある兄弟なんぢやアないかね。君に僕を兄と思ふ心があるなら、弟が兄に對して家事の相談を爲る、當然の事だと云ふ心持で以て話を爲る氣になれば、少しも遠慮するには及ばないんだ。元二君、君は然様は思はないのかね。」

勝彌に何時にかはらぬ語調で斯う云はれると、元二は辛いとは思ひながら話を爲ぬ譯には行ない。話をして、其同情心に縋りたい心にもなるのである。けれども、尙ほ躊躇して暫時は話出し得ないで居た。

勝彌は齒磨粉を唾液と共に吐出し、水口から顔を入れて口を嗽いで、また此方へ来て、「元二君、僕は大変察してゐるんだよ。併し、それは唯僕の想像に止まるのだから、いよ

いよ然様だとは云へないんだ。だから、君に聞いて見るんだよ。君、母さんの手元が大分不如意らしく察せられるんだが、然様だらうね。」

「然様なのです。」と、元二は云ひにくさうに云ふ。

勝彌は首肯しながら、

「それから、まだ他にも何か……元二君、僕に隠す事は無いんだよ。此も殆んど僕の想像と云つて可いんだがね、準備金の方に手が附いてる様な事があるんぢやアないかね。」

元二は胸を抉られる様に辛い。で、勝彌を見た眼は勝へがたい不安の色に覆はれながら、
「先生の御察し通ななんです。ですから僕は、父と母とに大いに怒つて遣つたんですけれど。」

「怒つたつて爲様が無いよ。で、何かね、餘程減つてるのかね。」

「減つてるだけなら可いんですが、」と、また後を云ひ得ない。

「悉皆無い、皆無だと云ふのかね。」

「さうなんです。」と、元二は垂頭いて了つた。

「皆無なのか。」

勝彌も流石に憮然として、覺えず肩を擧げた。

「父も母も投機心があるから、此様事になつたんです。先生と彼程お約束をしたのみならず、萬事先生の御同情に頼つて居ながら、此様不都合を爲るつて事は無いんです。其内の五十圓は、叔父が浪費つたと云ふんです。」

「長夫君もかね。御祖母さんも御承知の上でかね。」

「それは知りません。ですが、お祖母さんは真逆承知ぢやなからうと思ひます。」

「僕も然様思ふ。併し、」

勝彌は何か云はうとしたが云はなかつた。元二は其が氣に掛るので、

「先生、僕は此だけ御託爲るだつて實に苦痛なんです。御託を爲ようと思つても、御託を爲る語が無いんです。弟が彼様ですのに、此様事が起るのも結局は父や母の投機心からなんです。父や母は如何して如彼なのかと思ふと、僕は實に残念でなりません。」と、眼には涙が浮んだ。

「此様事が起ツちや實際困る。僕にしても、此上如何しよう云ふ手段は無い。君も知ッてる通、僕は殆んど収入の全部を提出てるんだから、昨今は小遣にも不自由してるんだ。鐵ちやんに萬一の事でもあつたら、如何爲る意かね、父さんや母さんには其覺悟があるんだらうか。」

「それが無いんですから困るんです。」と、元二は泣聲になる。

「どうかねえ。」

勝彌は暫時考へて居たが、

「元二君、君も知つてる通、僕には定つた収入が無いから、つまり浪人なんだから、金を得ようとするには何か書かなきゃならない。よし書いたところで、何處へ遣るツて當が無いから、急場の間には合はないんだ。鐵ちやんが彼の重體なのに、何の準備も無いと云ては如何にも心細い。と云つて、僕には手段が無いから、父さんや母さん、長夫君とも相談して出来るだけの手段を講じるのは君の務だらうと思ふ。幸ひ長夫君も宅に在られる様だから、一時も早く協議して置く必要があるだらうと思ふ。僕は兎に角面を洗はう。」

勝彌が臺所に入ると、元二は尙ほ行んだまゝ太息を吐いて居た。

(三三)

勝彌は重勝夫婦長夫等が銀行の預金を引出して、消費し盡した今度の仕打に就いては、非常に不快を感じた。自分は彼人々の爲に出来るだけの好意を盡した意である。収入の殆んど全部を元二の母の手に渡して、家計を支へしめて居た。然るに、長夫は依然として其俸給を浪費して、一月たりとも自分との約を履んだ事は無かつた。それは假に大目に見て置くとしても、銀行の預金にまで手を着けたとは何と云ふ事だ。彼は俸給を浪費したのでさへ、自分に對して合すべき面目があるまいのに、平然として茶の間に新聞紙を讀んで居る。自分は何故に彼様男と彼様な約を結んで……それも自分から進んで結んで、望んで此不愉快な羽目に嵌つたのである。彼の非常識なのは今更云までもないけれども、此非常識な男を相手に爲て居たのは、自分とても非常識の謗は免かれる事が出来ない。思へば、滿らない事

を爲たものだ。

長夫は云ふに足らぬけれども、更に驚かすのは元二等の父母たる人々である。長夫とは違つて、一家の責任を負つて居る人達としては、餘りと云へば無分別過ぎて、呆れる外は無い。投機心のあるのが父母の失だと元二は云ふけれども、それも場合によるではないか。彼の銀行に預けてあるべき筈の金は、一家の運命にも繋り、自分に對する義理にも繋つて居て、唯投機が好きだからと云ふだけでは、容易に手を着けべきでは無いのだ。斯る人が斯る境遇に陥つて生活に苦しむのは止むを得ない自然の成行だ。斯る人々に對しては、自分も手を引くより外は無い。思へば氣の毒なものだ。これが元二と美都子の父母なのだから、自分は一層氣の毒だと思ふけれども、今は止むを得ない、手を引くより他は無い。

勝彌は重勝夫婦と長夫には殆んど愛想が盡きて、今日の中にも他へ轉宿したいと思つて居るけれども、さうまでは決しかぬる弱い心は、林や太田の思惑だの、元二や美都子の事だのを思合せて、此場合如何に處したものであらうかと、唯々煩悶するのみだ。

「此場合鐵ちゃんが死んだら、如何する意なんだらう。」

勝彌は今始めて此問題を想出したのではない。重勝夫婦が苦悶してるのも、此事あるが爲めとは知つて居たけれども、不圖斯う呟いた。

「悲惨だなア……乃公は傍觀すべきものだらうか。」

勝彌は覺えず太息を吐いた。

「先生、直ぐ御飯になさいますか。」

美都子が座敷の入口に膝を突いて、勝彌の答を待つて居る。

勝彌は平生に變らぬ美都子の美しい顔を見ると、夢からでも覺めた様な氣がして、何時になく凝乎と其顔を見た。

「先生、何如なさいますの。」

「飯は欲しくないんです、茶を一杯下さい。」

「御加減でも御悪いので御座いますか。」と、美都子は氣遣いさうに眉を寄せた。

「唯欲しくないので。」と、勝彌は笑を含んで、「病氣でも何でも無いんですよ。」

「では、お茶だけ。」

勝彌が首肯いたのを見て、美都子は退いた。

「乃公には傍観して居られない。そと……。」

勝彌は机に臂を凭せて、太息を付きながら考へて居た。

美都子が茶を持って來ると、勝彌は其を一口飲んで、

「父さんも母さんも、鐵ちゃんのお居でお居でなさるんですか。」

「父さんは然様ですけれども、母さんは臺所に用を爲て居ります。御用なら呼んでまゐりますは。」

「いや、用があるんぢやありません。」

「御祖母さんが先生に、彼方に入來ッしやつては如何で御在ますかッて。」

と、美都子は室内を見廻し、「此様玄關なんぞに居て戴いて濟まないッて、御祖母さんは心配して居ますのですよ。」

「玄關だッて何處だッて、其様事は如何でも可いんです。」

「ですけれども、茶の間の方がまだしも勝で御在ますよ。」

「難有う。なに、此處で可いのです。」

美都子が茶の間へ行くと、勝彌は座敷を覗いて見た。

鐵三は昨日と同じ様に熱く睡ッて居る様である。枕頭には重勝が思案に暮れた體で、腕組を爲ながら垂頭いて居た。

「今日は何様ですか。」

勝彌は聲を掛けながら座敷に入ッて、鐵三の枕頭に坐つた。

重勝は其正直らしい眼に涙を浮べながら、

「何も面白く無い様です。」

「困ッたもんですなア。醫師にも方法が無いと見えるんですね。」

「情無い事で、殆んど見殺にする様なものですから、如何にも可哀相でして。」と、指頭にて涙を拂つた。

「眞箇可哀相です。」

「何を云ふにも、私が意氣地が無いので、此兒なぞにも氣の毒です。最初ッから、大學あた

りの大醫に診て貰つたら、何とか手段があつたかも知れませんが、斯うなつて了つちや既う駄目です。併し、如何にも可哀相でしてな。」と、ほろ／＼と涙を零す。

重勝の好人物である事は、勝彌は豫て知つて居る。或場合には氣の毒に思ふほど、其好人物のところ同情してゐるのだから、重勝の途方に暮れて居るのを見ると、銀行の豫金を投機に浪費した事を責める心は失せて、共に其愛を分かちたくも思ふのである。

「鳥渡此方を拜借しますよ。」

お瀧は何時か玄關に入つて来て、座敷を差覗きながら隔の唐紙を掃切つた。

「僕は御免だと云つてるぢやないか。」

元二が玄關で斯う云つたのが、座敷の勝彌と重勝に聞こえると、二人は顔を見合せて、互に所在なさに眼を翳した。

「お前が其様事はかし云つて、お呉れだと、父さんや母さんは途方に暮れて了ふんだよ。」お瀧の聲は低かつたけれども、勝彌は能く聞得た。

「だって、父さんや母さんが悪いんぢやアないか。今更途方に暮れるたつて、其は自業自得なんだ。」

得なんだ。」

「それは然様かも知れないさ。だけれども御前、其様事を云つて、済むんなら、何でも無いけども、鐵ちゃんがいよ／＼と事にでもお成りだと、如何して可いか途方に暮れるんだよ。

其時になつて魔誤附く様だと、目も當てられないよ。お前さんも可厭だらうけども、其處を我慢してお呉れで、先生に相談して見てお呉れないか。元二、父さんや母さんを助けると思つて、お前私の頼を聞いてお呉れでないか。」

「僕には如何しても先生には云へないんだから。」

「何卒其様事を云はないで、ねえ元二、母さんを助けてお呉れでないか。後生なんだからねえ。」

元二は返辭を爲ぬ。

勝彌は静かに唐紙を開けて玄關へ出て行つた。

勝彌が入つて來たのを見ると、元二は顔を眞紅にして垂頭して了つた。お瀧は勝彌を仰見て愛想笑を見せながら、

「先生の御耳に入りましたでせうねえ。何時でも手前勝手ばかり申しますんですから、愛想を御盡かしなさいましたでせうね。ほ、ほ。」と、態どらしく笑つて見せた。

勝彌はお瀧が此様語調で談話を爲るのが嫌ひなのだ。況て他を馬鹿にした様な笑様をされたのだから、一入可厭氣も爲たし腹立たしくも思つた。

「元二君、今朝今一度、醫者を呼んで來ちやア如何かね。」

「御醫者に來て貰つたつて駄目ですよ。」と、お瀧は投出した様に云つて、「お金でなきやア口が利けない世の中ですからね、御醫者だつて先づ此方の様子から脈を取つて見て、其次第で藥を盛うつてんですから、幾度御醫者に見せたつて駄目ですよ。」

「ですけれども、其様醫者はかりでも無いでせう。今見て貰つてる醫者が其様不埒な奴なら、他の醫者に見せては如何ですか。總ての醫者が然様だと云ふものでもありませんまいからな。」

「駄目ですよ。」と、冷かな笑を浮かべながら、「先立物が無さやア、名醫も大醫も何にもなりやアしませんは。」と、急に情れて太息を吐いた。

勝彌は元二に對ひ、

「元二君、兎に角醫者を呼ぼうではないかね。」

「はい。」とばかりで、元二は體を動かさうともしない。

「呼びにお遣りなすつたつて、到底來て呉れる事ぢやありませんよ。今朝呼びに行りましたけれども、もう拜診したつて、手段が無いから、拜診する必要が無いと申しましてね、とうく來て呉れないんですもの。もう呼びに行くがものはありませんは。」

「では何ですか、鐵ちゃんに到底もう救はれないと云ふんですか。」

「さうなんですよ。」と、お瀧の眼には忽ち潤が見えて、「今日夕方までも、如何かつて申しますんですよ。」

「然何ですか。」と、勝彌も眶が熱くなつて、腕組しながら太息を吐いた。

「元二、お前から先生にお願ひ申してお呉れでないか。」

「僕は御免だ。」と、元二は垂頭いたまふた。

「困ツ丁とはねえ。」と、お瀧はまた悄乎とする。

「僕に何か御話があるんですか。」

「御話と申すと何ですけれども。」と、お瀧は躊躇ひながら、「實はお願ひがありますのですよ。」

「僕にですか。」

「はい。」

「何様事か知りませんが、兎に角伺って見ようぢやありませんか。」

お瀧も有難に直ぐに話出し得ないで居たが、

「實は何で御在ますの……今更此様事をお願申せた義理ではありませんのですけれども……それもね、彼兒さへ彼様事になりませんければ、決してお耳に入れるではありませんんけれども、他に如何と申して工夫が無いんですから、つい先生にお願申す事になりましたのですけれども……餘り手前勝手御在ましてねえ。」

お瀧は何だか要領を得ない事を云つて、勝彌の様子をじろくく見るのである。

勝彌は先刻屋後で元二から聞いて居るので、お瀧が今何を云ふ意であるかを能く知つて

居るけれども、態と知らぬ顔を爲て、後の語を待つて居た。

お瀧は自分が今云つたいいで、勝彌に其意味が解りさうなものだと語を断つて、じろく其様子を見て居たけれども何とも云はないので、尙だ解らないのか、察しの悪い人だと思ひながら、止むを得ず語を續いだ。

「先生、御話いたすのも誠に面目ないんで御在ますよ。實は何で御在ますの、生憎手元が詰つてましてね、お醫者を呼びましても、車夫の手當にさへ困る始末ですから、御藥代だつても、現金では拂へない様な譯で御在ましてねえ……ですから、御醫者も快く來診つて下さらないのかと思ひますのですよ。」と、勝彌の様子を窺ひながら、「先生に此様事をお話が出来た義理では御在ませんけれども、本當に止むを得ないので御在ますから、何卒ねえ貴方悪く思召して下さらない様に願ひますよ。」

お瀧は勝彌が何と返辭を爲て呉れるかと其様子を窺つた。

勝彌は態と準備金の事を質して見ようかとも思つた。併し、此處で其を問うたところで、既に消費された準備金が出て来るではなし、唯お瀧にさまりを悪がらせて、申譯をさ

せるだけの事で、何の甲斐もないのだから、お瀧が云ふだけの事を云はせて見ようと、依然黙つて居た。

「先生、御怒り遊ばしては困りますけれども、實際今御話致した様な譯で御在りますよ。其様譯なんで御在りますから。此様事を願はれた次第ではありませんけれども、先生に何とか御都合が願へませんでせうか知ら。何時でも手前勝手ばかり申し、本當に濟みませんねえ。ほ、ほ、ほ。」と、態を軽く笑つて見せた。

「僕に金の都合が出来ないかとお云ひなされるんですか。」

勝彌は平生と少しも異らぬ語調で問うて見た。

「さう仰有られると、實に穴にも入りたい程面目ないので御在りますよ。彼様に種々御世話になつて居ながら、此上には、いくら何だつて申上げられた譯ではありませんけれども、今お話を致した様な譯で御在りましてねえ、何分困りますものですから、つい御馳申します様な次第で御在りましてねえ。」

「御尤です。能く解りました。併し、僕にも金策の當は無いです。」

勝彌はきつぱりと云つてのけた。

お瀧は平生の勝彌なら、出来ないまでも工夫して見よう位の事は、ごちらにしても云つて呉れるだらうと思つた當が外れたので、拍子抜けする、當惑はする、つい顔色迄も變つて、勝彌を見た眼の中には不快の色さへ浮んで居た。

勝彌は暫時してから、

「父さんも御居でなさるし、長夫君も幸ひ御居での様ですし、御二人で御相談なすつたら、平生とは違つて非常な場合ですから、御都合が御出来なさる事と思ふんですが、さうなすつては如何でせう。父さんが長夫君へ御話なさるのが御迷惑なら、及ばすながら僕が代つて御話しても可いんです。さうなすつては如何ですか。」

「それは然様ですけれども。」と、お瀧も流石に返辭に困つて、太息を吐くのみだ。

「さうなさるより他に、御手段が無い様に思はれるですか。」と、勝彌はお瀧の顔を見た。

お瀧は歪頭しながら、

「それが何だね。」

「それが左様行かないと云ふのですか。僕には然様は思はれないですけども、何か御事情が御在りなされるのですか。」

「貴方には御話申すのも面目ない事情が御在りしてねえ。」と、語を断つて太息を吐く。

「何様御事情が知らないですが、僕に御遠慮なさるには及ばないでせう。次第に依つては、僕も大いに盡力しようと思ひますから、遠慮なく御話下すつては如何ですか。」

お瀧は無論勝彌に事情を打明けねばならぬとは覺悟して居たけれども、自分の口から何も云難い。元二に前以つて話して置いて呉れる様に、其上に勝彌に金策を頼んで呉れる様にと命じて見たけれども、僕には其様事は云へない、僕は御免だと云つて承知して呉れぬ。今は自分の口から話すより外詮方がないと思ふけれども、どうも口が重たくて、ならう事なら元二に話して貰ひたく、元二に頻りに目配を爲たけれども何の甲斐も無かつた。

勝彌はお瀧が話し難がつて居る事情を百も承知して居るので、お瀧の事だから、此様に話し難がらないで、平氣で云出す事と思つて居たのに加此だから、實は意外に感つて居るのである。此邊を思ふと、お瀧と云ふ人も自分が想像して居たよりは正直だ。美都子の母

としての品性はと云ふ事になれば、甚だ遺憾だと思ふけれども、決して憎むべき人ではない。云難さうに見えるのを、強て云はせるでもない。よし、乃公から云出して善後策を講じる事に爲て、早く始末を着ける事にせねばなるまい。

「母さん、實は先刻元二君から聞いた事があるんですが。」

勝彌が斯う云出すと、面目なさるかと思つたお瀧は覺えず膝を進めた。お瀧は既に勝彌が承知して居るとすれば、自分の口から云出すと云ふ可厭事から免かれ、直ぐに後の相談に話が進められると喜んだのだ。

「元二からお聞きなすつたので御在りますか。まことに申譯がありませんねえ。」

「過ぎた事を、兎や角申すでもないとは思ひますが、餘り意外なので、實は妙からず不快を感じて居たのです。」

「御道理で御在ります。先生へは實に濟まないとは存じましたけども、つい其の、さう爲たくない〜と思ながら、如彼事になつて了ひましてねえ、本統に申譯が無いので御在りますよ。何卒ねえ、御勘辨下さいまして、今後とも宜く御願申します。」

「勘辨するも爲ないも無いのです。銀行の預金は元來貴女方の物なから、如何なさうとも僕が口を出すべきではないのですけれども、僕と御約束なすつた事だけは守つて戴きたかつたのですよ。」

「どうも申譯がおりません。」

「併し、其はもう過ぎた事です。唯困るのは今後の始末でして、僕は御存の通り一介の書生、云はゞ浪人で、御宅に御厄介になつて居る位なから、差當つて金策の當が無いので、残念だと思ふですが、止むを得んですから、其御合に願ひたいのです。」

勝彌に斯う云ひ切られると、お瀧は何とも絶り様が無く、殆んど途方に暮れる思である。

勝彌は口頭では金策が出来ぬと断つたけれども、何とか工夫が無いものかと胸裡では頻りに思案を凝して居た。お瀧が途方に暮れて居るのを見ると、愛兒がまさに死なんとするに臨んで、其跡始末の金策の當もないとあつては、母の身として其苦痛は如何ばかりであらう。斯る時の爲の準備金たる、彼の預金を浪費したのは憎むべきだけれども、今の場合

其を咎めて居たとて何にもならぬ。其を罪として之を救はぬと云ふのは、人として忍ばるべき事では無い。此事の終んだ後は兎も角も、今の場合之を救ふの道を講ずるのが、乃公の取るべき道かも知れぬと、種々考へて見たけれども、さて此と云ふ手段が思當らないのである。

「元二、お前からも先生にお願ひ申してお呉れ。鐵坊が今にも斯うして事になればお前、第一其後始末を爲て遣る事さへ出来なからねえ。」と、お瀧は泣くのだ。

「だつて、僕には其様事は出来ない。」と、元二の聲も曇つて居る。

「先生は、父さんや長夫なんぞとはお違なさんだからねえ。長夫は一月勤務めた月給が辛と二十圓しきや取れないでせう。父さんは父さんで、今が今と云つては一圓の工面も出来ないんだしね、如何しても先生にお願ひするより外に詮方が無いんですよ。先生は何でせう、一晩か二晩か御睡い思を爲さるへすれば、二十圓や三十圓のお金は、右から左にお取りなさるんだつて云ふんでせう。だから、一時融通して下さいさる事だつても、父さんや長夫とは同一にならないんだから、其だからお願ひ申して下さい云ふんだよ。此様事を申し

ちや悪いかも知れないけども、脊に腹は替られないんだからねえ。元二、お前も何卒口を添へてお願い申してお呉れ。ね、後生だから。」

「母さん見たいに失敬な事を云ふなら、僕には尙ほ願へないよ。母さんは先生を如何思つて、其様失敬な事を云ふんだよ。實に失敬だ。」と、元二は一入臆面を爲た。

「だから、悪いかも知れないけども断つたんぢやないかね。母さんの身にもなつて御覽。」と、涙を拭く。

勝彌もお瀧の語——先生は一晚か二晩睡い思をすれば、右から左に金が取ると云つた語には、一方ならず感觸を害したのだ。自分が此まで出来るだけ餘分にお瀧の手に渡した金を、右から左に直ぐに取れた金、骨も折らず苦痛も感じない金だと思つて居るから、此迄とても浪費に近い費ひ方を爲、今また鐵三の後始末を乃公に負擔せようとするのであらう。何と云ふ無禮、人を馬鹿にした仕方だ。乃公も今となつては大いに考へねばならぬ。斯る人々と同居になつて居る乃公の前途に就いて、乃公は深く考へねばならぬ。此が美都子の母であるかと思ふと情ない。乃公と美都子と同居になつたとして、其後が如何である

かに就いても考へねばならなくなつて來た。此が美都子の母であるかと思ふと、美都子の爲にも、自分の爲にも大いに悲しまねばならぬ。あゝ、美都子と乃公との事は果して如何なるであらう。憐むべきは美都子だと、胸が迫る様な氣がした。

けれども、今の場合が場合だから、此儘手を引くと云ふのも、人として忍ばれない。出来るだけの手段は取つて見ねばならぬ。乃公の進退を決するのは其後の事だ。さて、如何したものであらうか。

「母さん、貴女の仰有る様に、金が容易く取れる僕ぢやないんです。其様誤解を爲て居て下さつちや困るですよ。併し、鐵ちやんの爲に出来るだけの手段は講じて見ます。だが、當にはならんですよ。父さんにも長夫君にも、大いに奮發して戴かなきゃアならないと思ふんです。僕も奔走するですから、御二人にも奔走して貰ひたいですな。僕は直ぐに出掛けます。併し、當にはならないんですよ。」

お瀧がもう金策が出来たかのように喜ぶのを、勝彌は苦々しく思ひながら家を出た。

(三四)

勝彌は眞箇金策の當が無いのだから、船町の家を出る事は出たが、さて何處へ行つて何様手段を取つたものかと行く先に當惑した。

「林より他に相談する處も無いが……彼男にしても餘裕のある筈が無いから、相談するのは彼を苦しめる様なものだ。林に相談するのは止さう、止した方が可い。」

林より他に相談する男は無いと思ひながらも、斯う思返したが、さて何處へ行かうと云ふ當が無い。業瘦ならばとも思つたが、彼奴に此様事で頭を下げるのは可厭だと、思つては頭を振つた。

「兎に角林の家を訪ねて見よう。何も林に奔走させようとは思はない。唯相談するだけだ。」

四谷見附から電車に乗り、江戸川行に乘替えて、赤城下なる御組の林が家を訪問れると、

丁度國雄が出先から歸宅つたところであつた。

勝彌は鐵三が重病に罹りて、其命の朝夕を測られざる迄に迫れる事を始めとして、調金の要ある事情などを話して、

「君に奔走して貰ひたいと云ふのではないが、何とか手段はあるまひかね。」

「もうね、僕にも差當つて手段が無いんだかね。」と、國雄は考へて居たが、「でも、何ぢやアないか、彼家には準備金がある筈ぢやアないかね。何時だつたか、何かの話の時に、僕は君から其話を聞いた様に思ふよ。」

「ある筈なんだ。それが無いんだから困るさ。」

勝彌は彼の準備金が重勝夫婦の投機心と、長夫の浪費との爲に何時か皆無になつて居た事を話して、

「僕も心外でならないんだ。だからね、僕は此事が濟んだら彼家を去らうと思ふ。」

國雄は頻りに首肯して、

「其が可い。僕は最初、君が彼家に同居する事からが不賛成だつたんだ。屹度去りたまへ

よ。必ず去らんやア不可よ。」

勝彌は首肯は爲たが、眉を蹙せて凝乎と考へて居る。

國雄は勝彌の様子に心に首肯さながら、

「君が去るとして、美都子さんの關係は如何するかね。」

「其れなんだ、僕は其事があるから決しかねて居る。」

「では何かね、其後、其事に就いて話を進めていもあるのかね。」

「いや、彼時の儘なんだ。唯僕の意が一層美都子に傾いたと云ふだけで、彼家の人達と彼時以上の約束なぞ爲やせんけれどもね。」と、語を断つた。

國雄は勝彌の美都子を愛する意が、斯る時の進退に迷ふまで深くなつて居るのを知つたので、迂闊に可否を云ふべきでないと思つた。

「林君、僕は自白するかね、僕は美都子を捨てまで彼家を去り得るか、其が自分ながら疑問なんだ。だから、僕は一層苦痛を感じてるんだ。けれども、彼様母親があるかと思ふと、僕も有繋に躊躇する。それと同時に、彼様母親があるから美都子が一層可哀相で、如何して

も捨てられない様な氣がするんだ。僕は實に迷つて居る。林君、君遠慮しないで意見を云つて見て呉れたまへ。」

國雄は凝乎と勝彌の顔を見て居るのみで、容易く口を開かないのである。

「局に當る者は迷ふと云ふが、今の僕が其なんだね。捨てるか取るか、留るか去るか、一歩右に踏出すか左にするか、唯僅かに此一步に迷つて決しかねて居るんだ。僕は自分ながら不思議でならない。僕は此様な女々しい男ぢやなかつた。自分の進退に迷ふ様な事はなかつた。行らうと思へば断じて行ると云ふ決心は、何時でも出来ると思つて居た。それが今度に限つて、唯迷に迷ふばかりで、決断が着かないんだ。僕は君に對しても羞しいと思ふ。併し、此が事實なんだから情ないさ。君、意見があるなら云つて呉れないか。」

勝彌は自分ながら不思議だと云ふけれども、國雄は些も不思議でないと思ふのである。美都子を愛する情の爲に囚れて居る勝彌だもの、進退去就に迷ふのは當然である。自分に意見が無い事は無いが、その位な事は勝彌が能く知つて居る。知つて居て迷つてるのだから、結局は勝彌の決断如何に在るので、自分が知れ切つた意見を述べたところで、左までの効があ

らうとは思へない。勝彌自身の決断に委せて置ても、傍から注意を興へて見ても、勝彌の平素の性質から察するのには、其結果は同一であらうと思ふ。それと知りながら惹き意見を述べたのは、却つて迷を深くさせる様なものだ。無効だと知りながら意見を述べたのは恐

だ。『僕には別に意見が無いよ。君は唯迷つて、困ると云ふけれども、君自身の大事を決し得ない様な君では無い筈だ。』

『いや、僕は實際決しかねて苦しんでるんだよ。』

『其様事があるものかね。如何しても決断しなさいやアならない時が来れば、君は立派に去就を決し得る人だと僕は信じてる。だから、僕は意見を云はない。云つたところで、君が既に考へて居て而て決し得ないで居る事なんだから、何も云ふ必要は無いと思ふから云はない。』

勝彌は覺えず微笑んだ。

『解つた。僕の平素を知つてる君だから、別に意見を云はないと云ふんだな。よろしい。』

其だけでも僕に取つては大なる助言だ。君の云ふ通り、其時が来れば何とか決断が着くかも知れない。』

『君悪く思つては呉れないだらうね。』

勝彌は高く笑つて、

『君にも似合ふ事を云ふね。其様事を云ふ様だと、君は勝彌を知らないんだね。』

『いや、僕が悪かつた。』と、國雄も笑出したが、聽て真顔になつて、『で、何かね……意見を云はないと云ひながら、此様事を聞くも變だがね……あの美都子さんの事だがね。美都子さんと君との間には、何か代替した事でもあるのか。』

『いや、何にも無い。』

『約束などは無いとしても、何か話し合つた事でもあるかね。』

『それも無い。僕は一度だつて、打解けた話を爲した事もないんだ。併し、僕は美都子を信じてる。美都子も僕を信じてるだらうと思ふ。』

『それだと、君は美都子さんを待たいんだね。』

「無論どうせ。」

勝彌は斯云ひながらもお瀧の事が胸に浮ぶので覺えず太息を吐いた。

「君と美都子さんと互に深く信じ合つてるのなら、それは同棲になるのも可い。僕が敢て嘴を挿す必要も無い様だ。」

國雄は斯う云つて、今の分では勝彌が到底柏木を去り得まいと思つた。

勝彌は頭を傾げて考へて居たが、

「其事は先づ措く事に爲よう。それよりも目下の急務は金策なんだがねえ。此様事で、度君を苦しめるのは、如何にも心外だけれども、君何とか手段はあるまいか。」

「どうだね。」と、國雄は眉を顰せて凝乎と考へて居る。

「君、彼の新聞社の方は如何だらうかねえ。」

「然様だね。」と、國雄には躊躇の色が見えながら、「日外の小説が高評だつたんだから、談じて見たら行かん事も無いかも知れないね。だが、君は書上げた原稿でもあるかね。」

「それは無い。書けば今からでも直ぐに書掛かるんだ。」

「それで、急場の中に合ふ意かね。」

「一篇脱稿してからでなきや稿料が貰へん様だと、到底急場の用には立たないんさ。其處を君が何とか談じて呉れて、前に稿料を受取る様にして呉れるんだ。如何だらうね、行くまいかね。」

「やア、難かしいね。」

「どうか。君が難かしいと云ふのを、強て頼むと云つたところで、唯君を苦しめるばかりだから、其事は止すと爲よう。」

「他に手段があるのかね。」

「それは無い。」

「手段が無きやア困るだらう。」

「困る事は困るけれども、止むを得ないと。」

「止を得ないで済むかね。」

「済まないけれども詮方が無いさ。僕はお暇するよ。」

勝彌は立上らうとした。國雄は勝彌が怒つたのでは無いかと氣遣はしく、

「蒼川君、君心地を悪くして呉れちや困るよ。」

「は、は、は、は。」と、勝彌は高く笑つて、「其様事で心地を悪くする様な勝彌ぢやアないよ。君は、僕を解してる様で解して居ないんだね。」

「さう云はれると赤面する。ミア坐つて呉たまへ。」と、勝彌が腰を落付けたのを見て、「僕も出来ない迄も奔走して見る意だ。それで何かね、金額は幾許入るのかね。」

「さう。」と、考へて、「三十圓位は入るだらう。」

「そんなに入るのかね。」

「生活費も盡きてる始末なんだからねえ。」

「さうかね。僕は出来るだけ盡力して見る意だ。」

「よろしく頼むよ。」

「併し、成否は受合ふのだから、君も手段を盡くして見るが可いよ。」

「無論其意さ。では失敬する。」

「僕も夕刻までには、君の家へ行く意だ。」

「さうして呉れたまへ。」

勝彌は國雄の家を辭して、赤城の坂を通寺町へ出て、神樂阪の方へと思索しながら辿つて、笹筒町の角に来ると、後から呼掛けたものがある、

「久能木君、久能木君。」

見返ると紫瘦が何處へ行つた歸途か、背後から足早に近付いた。

「蒼川君、久瀬だッたね。」

「僕も長く御無沙汰したッけ。」

「林君でも訪うたのかね。」

「さうなんだ。」

「ぢやア、歸途なんだね。」

「ん。」

「僕の宅に来て呉れないか。種々話があるんだがね。」

「ん、んね。」

勝彌は紫瘦の家に伴はれて、都根子に對する苦情なぞ聞かされるのは難有くないと思ふ。瀕死の病人を控えて金策に奔走して居る今、べんくと話込んで居て如何なるものかと思ふ。で、直ぐに別れる意で、

「今日は御免被りたい。實は少し奔走してる事があるもんだから、其内に訪問する事に爲よう。」

「さうかねえ。都根子も君に逢ひたがつてるんだよ。」

「いづれ其中訪ねるから、妻君にも宜しく云つて呉れたまへ。」

勝彌は紫瘦の家に伴はれたくないと思ふが、紫瘦は伴れて行きたくてならない様な気がする。

「蒼川君、話ばかりでなく用もあるんだがね。」

「用があるッて。何様用かね。」

「僕の宅へ行つて話さうよ。」

「込入つた用かね。込入つた用なら、今日は御免被りたい。」

「なに、込入つてなんか居ないよ。實は何なんだ、君に原稿の持合があれば、向ける處があるんだがねえ。」

「ん、んか。」

勝彌は言下に持合があると云ひたかつた。けれども、紫瘦には成丈け周旋して貰ひたくないと思ふ。其爲に如何と云ふ事は無いけれども、何だか紫瘦から恩を被せられたくないので、二の句を續がなかつた。

「君、持合が無きやア、新に起稿て貰つても可いんだよ。そんな事だの、他にも種々談話があるんだから、一寸僕の宅に寄つて呉れたまへな。見附を入れれば直きなんだから、それほど廻路と云ふのでもないだらう。都根子も君を待つてるんだよ。」

紫瘦が頻りに勸めるのを、勝彌は強て辭し去らうとしたが、考へて見ると、紫瘦の語に従くより他に、今のところ金策の手段が無いのだ。原稿は推敲に推敲を加へて、會心の作として世に問ひたい一篇が、今でも机の上に尙ほ推敲したさに置いてあるのがある。彼原稿

は紫瘦の手を借りて世に出したくない。けれども、鐵三が今夜にも死い事になれば如何とも爲様が無い。鐵三は美都子の弟だ。美都子の爲になら、自分は出来るだけの事を爲る意で居る。鐵三に盡すのは美都子に盡すのだ。それでなくとも、彼の幼き人を葬送の資さへなき間に死せしむるのは如何にも忍ない。好し、乃公は幼き人の爲に自分を捨て、彼の一篇を紫瘦の手に渡す事に爲よう。

「君が其様に迄云つて呉れるのを、強て辭すのも何だから、お供する事に爲よう。」

「君、来て呉れるッて。それは難有い。都根子も眞箇君に逢ひたがつて居るんだから、何様にも喜ぶか知れないよ。」

紫瘦はにこ／＼しながら勝彌を促して我家へ急いだ。

勝彌は紫瘦に伴はれながら、都根子が頃日の様子を問うて見ると、紫瘦は相變らずさと苦笑をする。尙ほ人の妻らしからず女らしからぬ舉動を續けて居るかと思ふと、都根子の顔を見るさへ可厭な心地がする。

早くも紫瘦の家に着くと、水鏡とお玉とが玄關に出迎へたが、都根子は影さへ見せな

つた。

紫瘦が不愉快らしい顔を爲ながら入る後から、勝彌も玄關に上つて、呷く様な小聲で、

「小川君、奥さんは在宅かね。」

「はい、お居でなさいませ。」

勝彌は首肯しながら座敷へ行くと、茶の間に都根子の聲が聞こえた。

「さう。久能木さんが……お珍らしいはね。」

紫瘦は茶の間を見返り苦笑を爲ながら、

「蒼川君、まア坐つて呉れたまへ。」

水鏡が進めた座布団に勝彌が膝を落した時、茶の間の唐紙を開けて都根子が入つて来て、夫へは眼も呉れず勝彌へ笑掛けて、

「入らッしやい。お珍らしい御在んすはねえ。如何して入らッして下すッて。」と、坐つて

丁寧に會釋を爲し、「大變に御無沙汰を致しました。柏木さんでは、御變も居らッしやいませんでせうね……美都子さんにも暫くお目に掛りませんは。本統に御無沙汰ばかりで済みま

せんかね。」

勝彌は都根子に喋らせて置いて、唯一二の返辭を爲たのみである。

「玉に、火と茶を持たせて寄越して下さい。」

紫瘦が斯う云ふと、都根子は茶の間へ立つて行つた。紫瘦は勝彌を見て淋しく笑つた。

「相變らず如彼なんだからねえ。」

勝彌は唯首肯いた。

其處に水鏡が火を運んで來、お玉が茶を持つて來た。

「小川君、留守に誰も來なかつたかね。」

「はい、何人も見えませんでした。」

「さうか。君は彼方へ行つて呉れても可いんだよ。」

水鏡は此様時に何時も満らなさうな顔をする、今日もその顔を爲ながら玄関へ行つてしまつた。

「若川君、君は相變らず愉快な日を送つて居るんだらうねえ。實に羨ましいよ。」

「いや、さうは行かんぞ。」

「君は其様事は無いさ。」

「それが然様でないのだからねえ。」と、勝彌は鐵三の重病にて旦夕を測られざる事から、自分が金策に奔走して居る事を話して、「其様譯でね、僕も大いに苦しんでるんだよ。」

紫瘦は首肯ぞ、

「其は氣の毒だねえ。併し、美都子さんとの交情は、舊に依つて變らないんだらう。」

「さう。それだけは變りもしなければ進みもしない。」

「だから、君は羨ましい。僕の家庭を見たまへ、宛然砂漠の中にでも住んでる様だ。」

「困つたもんだねえ。」

紫瘦は不樂しそうに太息を吐いて、眉根を寄せた眼に何處を見るときもなく見て居る。

勝彌も暫時黙つて居たが、

「紫瘦君、先刻の君の話の事ね——脱稿てる原稿は無いかと云つた事ねえ、彼は引替に稿料を受取る事が出来るのかね。引替に受取れるなら、實は一篇持合せてるんだよ、何様もの

だらうね。」

「どうだね。」と、紫瘦は答に躊躇つた。

勝彌は紫瘦が躊躇つたのを見ると、もう可厭な氣が爲る。此だから乃公は紫瘦に頼みたくないと思つたんだ。口に出して了つてから、彼様様子をされるのが乃公は癪に障つてならない。此差迫つてる場合に、當もなしに此様處に居て何になる。早く此家を去つて他に手段を求めなければならぬ。直ぐに辭し去るを爲よう。

勝彌が胸の中に歸仕度を爲る様子を、紫瘦は早くも見て取つて、

「君、まア寛話して居て呉れたまへな。君の今の話ね、出来る出来ないに拘はらず、談じて見ようと思ふんだよ。併し、君、急ぐんだらうね。」

「無論急ぐのさ。併し何だ、見込の無いものを、強て談判して呉れなくても可いんだ。」

「君にさう云はれると、何だか可厭な心地がするね。僕が出来るか出来ないかと云つたのは、萬一の場合を云つた譯なんだから、氣に掛けて呉れないが可いよ。僕は無理にも承知させる意なんだよ。君の方の事情を聞いて見ると、實に容易ならん場合なんだからねえ。僕

は出来るだけ盡力する意だ。」

「難有う。併し、」

「兎に角原稿を寄越して呉れたまへな、無理にも押付ける意だから。」

「押賣なら御免被る。」

「一々言答を爲て呉れちやア困るね。悪い様には爲ない意だから、兎に角原稿を寄越して呉れたまへな。」

勝彌は如何しようかと思煩ふのだ。平生ならば疾に斷絶つて居るのだ。煮切らない文句を聞かされて我慢してる勝彌ではない。けれども、氣に掛るのは鐵三の事で、自分が今斯く話してる中にも、何様な事になつて居ようも知れぬ。既に死の手に攫れて、其父母同胞の涙に圍まれて居ようも知れぬ。そして、お流を始め一同の人々が、自分の歸宅を何様に待つて居様も知れぬ。それを思ふと、他に何等の手段も見込もなき今、自分が唯感情の爲に紫瘦の周旋を謝絶するのは考へものである。自分は何と思つても、紫瘦に頼む心にはなれないけれども、彼の幼き人と、其一家の人々の爲に忍ばねばならぬであらうか。乃公は此様場合

に此様に迷つた事はない。乃公には今日に限つて、何故一刀兩断の決心が出来ないのか。断じて謝絶するか、忍んで依頼するか……此様に迷ふようでは乃公はもう駄目だ。さて如何したら可いか。唯其一を撰ぶのだけでも……。

「蒼川君、決して君の面目に關する様な事は爲ない意だから、直ぐに原稿を寄越して呉れたまへ。」

勝彌も今の場合紫瘦に依頼するより外手段が無い、依頼すべしと決心した。

「では、直ぐに歸宅つて、直ぐに届ける事にするから、よろしく頼むよ。」

「あ、能いとも。」

「では、失敬するよ。」

「待ちたまへ。僕が君の宅へ一緒に行つて、直ぐに其足で先方へ廻る事に爲よう。其方が些時でも早く運ぶ譯だからね。」

「さうかね。濟まないけれども然様して呉れたまへ。」

「都根さん〜。」と、紫瘦は都根子を呼んで、「蒼川君がお去りだよ。」

「まア御宜いぢやありませんか。」

「また伺ひます。」

勝彌は紫瘦と共に柏木へと急いだ。

(三五)

鐵三は勝彌が金策に出掛けて間も無く、お瀧の胸に懷かれたまゝ息を引取つて了つた。重勝お瀧、千代乃や元二美都子等の悲歎は説くまでもない。長夫までが何時になく醫師を迎に駆付けなぞしたけれども、何の甲斐もなかつた。斯る中にも差當つて困るのは、其始末を了ける爲に無ければならぬ金である。成否は請合れぬと云置いたけれども、何とか爲て呉れるらしい勝彌の歸宅を、今かくと待つて居る中に、二時間と過ぎ三時間と空しく経つので、別にお瀧と重勝は氣が氣でないのだ。

重勝は元二を玄関に呼出して叫んだ。

「久能木さんの出前を、お前は知ってるだらうな。」

「僕は知りません。」

「でも、心當はあるだらうな。」

「心當と云つて、僕には見當が付きません。」

「あの何とか云ふ人だったな、妻君が能く遊に見えた、それあの何とか云つたッけ……さうだ、太田だ。彼の太田さんの家だと思ふんだが、如何だらうね。」

「太田さんですって。太田さんは先生が嫌つてお居でなされるから、此様事の御相談にお行でなされる事は無い筈です。」

「では、何處へお行でたッたらうか。もう他に心當は無いかい。」

「どうですなえ。」と、考へて居る。

「お前氣の毒だがね、太田さんなり其他なり、久能木さんが行かれさうな家へ行つて見てお呉でないか。鐵坊を彼儘にしても置けないし、何とか始末を着けなさやアならない。それには、先生が早く歸つて下さらないぢや、手も足も出ない始末なんだから、お前御苦勞だ

けれども、大急で先生を探して来てお呉れないか。事情が切迫してるんだから、お前も一つ奮發して呉れて、直ぐに出掛けて呉れるが可い。」

元二は佛頂面を爲し、

「僕は行かない云はないけれども、先生に對して面目なくつて、何にも云へやしないんだ、父さんが株なんぞに手を出さなさやア、此様に困る事は無いんだに……母さんだつてさうです、先生に金策なんぞ頼まれた義理ぢやないんですせ。」

「今其様事を云つたつて、何にもなりやアしない。其様事を云つてる中には、電車まで行つて了ふ。さッ、早く行つて来てお呉れ。」

元二は否だと云ひたかつたけれども、死骸となつた弟の事を思ふと、自分の久能木に對する面目なぞ思つて居る時でないかと考へた。先生は太田に行かれる筈は無い、多くは赤城下の林氏へ行かれたのであらう。赤城下へなら電車で行くよりも、合羽坂から山伏町矢來へと掛つて、一走に走付いた方が早いかも知れない。何にしても出掛ける事に爲よう。

元二は否だと思ひながらも、直ぐ我家を出て、門を出るとはたと、勝彌が紫瘦を伴つて歸

つて来たのに出會つた。

「君、何處へ行くのか。」

「先生を御迎にまゐらうと思つたんです。」

「なに、僕を迎に。」と、元二の顔を見ると涙の痕が鮮だ。「鐵ちゃんは何様かい。」

「いけませんでした。」と、垂頭して眼には涙が溢るゝばかり差含んだ。

勝彌は紫瘦を見返つて太息を吐いた。

「久能木君、事情が一層切迫して来たのだから、僕は今は弔辭も云はない事にして、直ぐ奔走した方が可いかと思ふよ。此處に待つてるから、君の原稿を持つて來たまへ。」

紫瘦が斯う云ふと、勝彌も無論さう爲て貰ひたいから、直ぐに家内に入つて、纏て一篇の原稿を持つて出て來た。

「此なんだがねえ。多少自信を以つて筆を執つた作なんだが、未だ推敲が足りないから、實は今出したくはないんだよ。けれども、此様場合で止むを得ないから、願ふ事にはするんだがねえ、實に情ないと思ふんだよ。」

紫瘦は氣の毒さうな様子を爲て首肯しながら、

「僕も大いに同情するよ。だけれども、此篇以上の傑作が今後出來ないと云ふ譯ぢやなし、詮方がないと諦めたまへな。」

「そりや諦めてるさ。併し、残念だよ。君、何卒充分盡力を頼むよ。」

「よろしい。僕は兎も角も先方へ行つて談判して見て、直ぐ其結果を知らせる事にするよ。では、僕は出掛けよう。皆さんへ宜しく云つて置いて呉れたまへ。」

「御苦勞だね。」

紫瘦は二三歩行掛けたが、直ぐ引返して來て、既に耳門を入つて居た勝彌を呼掛けて、「稿料と引替にと云ふのは實際困難なんだよ。だからね、多少條件が附くかも知れないよ。」

「辱しめられない程度でなら、多少の條件は承知しても可い。」

「兎に角僕に任せて置きたまへ。」

紫瘦は去る。勝彌は直ぐに家内に入り、座敷へ行つて見ると、鐵三の顔は白い手巾にて

被はれ、傍には千代乃と美都子が眼を泣腫して居た。

「鐵ちゃんがいけなかつたさうですね。」

「彼様に御心配下さいましたけれども……。」とばかりで、千代乃は襦袢の袖口で眼を拭きながら泣く。

「美都子さん、貴方も寂しくなつたね。」

美都子は何にも云ひ得ないで只泣く。

「御母さんは茶の間ですか。」

「はう。」

勝彌は茶の間に入ると、重勝夫婦と長夫の三人が火鉢を圍んで、ひそくと相談を爲て居た。元二は玄關へでも行つたのか其處には見えなかつた。

「先生、御願した事は如何で御在ませうか。」と、お瀧は勝彌の顔を見るより斯う問掛けて、

「鐵坊は彼様になつて下さるしね、先生の御歸宅をお待ち申して居たので御在ますよ。」

「御苦勞さまでした。」と、重勝は勝彌の顔を見上げた。

「いろいろ御盡力を願つて恐縮です。」と、長夫は平素に似合しからぬ事を云つた。

また其處迄運ばないのですとは、人々の様子を見た勝彌には云難い。けれども、ありの儘を云ふより他に語が無い。

「太田が其爲に奔走して呉れてるんですから、彼男から報知があるまでは、何とも御返辭が出来ないんです。」

お瀧はさも失望したらしい顔をしながら、重勝に顔を見合せて、

「鐵坊を何時までも彼様に爲ては置けないのに、如何したら能う御座んすでせうねえ。

所天が確乎して下さらなきやア、何だつて運びやアしませんは。」

勝彌を當にしたつて詮方が無いと云はぬばかりの口氣だ。

「乃公に其様事を云つたつて、今が今如何つて事は到底出来やアしないよ。」と、重勝は當惑の頭を掻くのみだ。

「其様事を云つてらして、鐵坊の始末を如何なさる意で居らっしゃるんですよ。可哀相ぢやありませんか。死んだ後まで不自由を爲せて、其で親の役目が済むと思つてらっしゃ

るんですか。え、所天は。」

「何人が其様ことを云つたよ。今が今何ッて詮様が無いのは、乃公が意氣地が無いからなんだ。乃公に如何にかなるものなら、乃公は昨日の中にも其準備を爲て置くんだがね、其が然様行かないから情ないんだ。鐵坊も乃公見たいな意氣地の無い者の子に生れたのが不運なんだ。可哀相だけれども、乃公には金の都合が出来ないんだから……何人が悪いのでも無い、人を恨む事は無い、悉皆乃公が意氣地が無いから發つた事なんだ。」と、重勝はぼろ／＼と涙を零した。

「其様事を云てらしたッて、何にもなりやアしないぢやアありませんか。」と、お瀧は長夫に對ひ、「長夫さん、お前さんが見てお居での通の始末だからね、お前さん何とか能い考案を出してお呉れでないか。お前さんは兄さんとは違つて、交際は廣いし、交際してゐる人達が一同立派な方ばかりなんだから、お前さんが此々だと事情を話してお頼みしたら、如何にか爲てお呉れかも知れないぢやアないかね。鐵坊の事で、お前さんに迷惑を掛けては濟まないけれども、此急場なんだからねえ。何卒悪く思はないで、奔走して見てお呉れでな

いか。長夫さん、姉さんが一生の御願なんだよ。銀行の方で何人かに相談して見て下さいな。後生だから、ねえ長夫さん。」

長夫は困り切つた顔の、何處かには冷かな色が見えながら、
「私も先刻から其事を考へてただだけれども、何人ッて烏渡相談する人が無いから困つてゐるんです。だが、奔走しないと云ふんぢや無いから、姉さん氣を悪くして呉れちやア困るよ。」と、疑乎と考へる様な風をして居たが、懸て太息を吐いて、「金ッて奴は、手に取つて見ない中は當にならなんだから、私だッて今此處で受合ふ事は到底出来なだけれども、出掛ける事は出掛けても見るし、出来るだけの奔走は爲て見るけれども、當に爲て居ちや困りますせ。私は兎に角出掛ける事に爲よう。」

長夫は直ぐに我家を出掛けた。

お瀧は思出した様に勝彌を見返つて、

「先生、太田さんの御返事は、何時頃お分りになりますでせうか知ら。」

「それは分らないです。併し、太田が奔走してるのは事實です。唯、僕の原稿を雑誌に掲

せなきや稿料を寄越さないか、それとも此方の希望を容れて、直ぐに寄越して呉れるか否か問題なんです。ですから、雲を攫む様な空な話でもないんです。けれども、今長夫君も云はれた通、手に取つて見ない中は安心が出来ないんですから、必ず調ふものと思つて居て下さつては困るんですよ。太田も此方の事情を知つて居るんですから、出来るだけの盡力は爲て呉れる事だと信じて居るんです。』

勝彌の方は空の話でないと聞いて、お瀧は俄に顔色を直した。

「先生、眞箇貴方ばかりが頼なんですから、何卒よろしく願ひ申しますよ。日外から御迷惑ばかりお掛け申して、また今度の事で御心配を願ふなんて、餘り勝手な奴だと思召すかも知れませんがね、先生の外には頼になる者はありませんし、御見掛申して願つて居るんですから、此上ともよろしく願ひ申しますよ。』

お瀧は斯う云つて態と愛想笑をした。勝彌はお瀧の輕薄な心の底まで見え透く様で、顔を見て居るのも可厭になつた。

「いづれ太田から返事があるだらうと思ひますから、其上でまた御話を致します。』

勝彌は突と立つて支關に来て見ると、元二が机の前に涙合んで居た。

「元二君、唯心配して居たつて爲様が無いよ。太田の方が、多分都合能く運ぶだらうと思ふから、其様に心配したまふな。何にしても、鐵ちやんを彼様に爲て置いちや可哀相だ。』

「何處へも報知せないから可かんですが、親類の者が隣家の人から来て、彼有様を見たら何と云ふでせう。死んだ者に爲て遣らなきやならないだけの事も、爲て遣つて無いんですから、何様に驚くか知れません。驚くよりも笑ふでせう。僕は其が残念でならないんです。』と、ぼろ／＼と涙を零す。

「それは僕も然様思つてる。何分にも鐵ちやんが可哀相だ。』

勝彌は袂を探つて、くしゃ／＼になつた紙塊を取出して解すと、共に解されつゝ見はれたのは二三枚の一圓札だ。

「元二君、僕の小遣が此處に三圓あるんだよ。一圓だけは、尙ほ奔走しなきやアならない時間の準備に残して置きたいから、二圓だけ母さんに上げて呉れたまへ。それで鐵ちやんの枕頭に、形ばかりでも可いから設備を爲て貰はうぢやアないかね。彼儘に爲て置いては、君

の云ふ通隣家の人に見られても困る。其金で出来るだけの事を爲て貰つて呉れたまへ。」

「はい。」とは云つたが、手を出しかねて、「先生に其様事を爲て戴いては、」

「何を云ふのか、君は。満らん遠慮を爲てる時ではないだらう。僕の云ふ通りに、爲たまへと云つたら爲たまへ。」

勝彌の叱る様な劇しい語調に、吃驚もし感謝もしながら、二枚の兌換券を茶の間へ持つて行つた。

勝彌は如何かして此悲惨なる光景から、柏木一家の人々を脱れさせたいと思つて居る。お瀧の言動の輕薄なものには眞箇愛想を盡して、此儘尙ほ同居して居ようとは思はぬ。此悲惨なる光景を見ながら去ると云ふ事は、人として忍びないから、此處で出来るだけの力を盡して、此事の濟み次第去りたいとの念が刻々に嵩まり行くのである。けれども、紫瘦に依頼した稿料一件が、此方の希望運んで呉れるか如何か。運びさうにも思はれるが、覺束なくも思はれる。運んで呉れば、此一家を悲惨の境から救ひ得ると共に、自分が去る上に就いても大いに便宜である。が、運ばないとすると其結果が如何なるであらうか、想像するだに勝へないのだ。

「乃公も矢張神經質か知ら。徒らに心配したつて詮方が無い。何か書いたら紛れるかも知れない。」

勝彌は原稿紙を受取して、何か書かうと筆を取つて見たが、何の感じも浮んで来ないので、意味も無い一字一の無駄書に幾枚ともなく書潰して居た。

其處へ重勝が元二の一年あたりの古交際帽子を手に爲ながら出て来て、勝彌にくぐく〜と禮を云つて、廳へ表へ出て行つたのは、何か買物に出掛けたらしいと勝彌は察して居た。

「先生、唯今は。」

お瀧が茶盆に茶を注いだ勝彌の湯呑を載せて出て来て、

「お蔭さまで經帷子だけでもと思ひましてね、今重勝に買ひに行つて貰ひましたので御座いますよ。」と、茶を進めて、「先生にはかし御心配を願つちや濟まないの御座いますよ。御存知の通意氣地無しが揃つてるもんですから、つい先生を頼に致すので御座いますよ。母も

美都子も何様に難有がツてるか知れませんが。唯今だつて、先生が斯々爲すつて下さつたからして申しますとね、何て御親切な事だらうツて、二人とも泣いて喜んでるんで御在りますよ。先生が宅に居らッしやつて下さるから、元二も仕合なら、美都子も仕合だツてね、母が始終申しては喜んで居るので御在りますよ。私だツて先生に見て戴けば、美都子も實に仕合ですから、口にくそ出しませんけども、蔭ではお禮を申して居るんで御在りますよ。先生、今後とてもよろしくお願ひ申しますよ。ですけども、先生は御迷惑で居らッしやいますはね。」と云つて、軽く笑つて見せた。

お瀧の云様が餘り空々しいので、勝彌は可厭な氣がする。先生は御迷惑で居らッしやいますねと、後から附加へた一語と笑つたので、一層可厭な氣が爲た。で、唯會釋を爲たばかりで黙つて居た。

「太田さんの御返辭は、今日爲て下さるので御在ませうね。」

「僕は其意で居るのです。併し、先方の都合で如何なりますか知ら。」

「今日御返辭が願へると都合が好いんですけども。」

「僕も然様思ふのです。」

「元二に御返辭を伺ひに遣はしては、如何で御在ませうね。」

「さうですなア。」と、暫時考へて、「さうしないだツて、事が運べば直ぐに返辭を爲て呉れる筈です。」

「然様で御在りますかねえ。」と、お瀧は不安に思ふらしい様子だ。

勝彌はむツとして、

「御母さん、僕の方の話は、當になりさうで實は怪しいんですから、其御意に願ひたいんですよ。此方ばかり當に爲てお居でなさつて、後で失望なさる様だと御氣の毒ですから、深く信じて下さらん様にしたいんです。」

お瀧が凝乎と勝彌を見ると、不快らしい色が眼にも顔にも浮んで居る。で、些と云過きたと氣付いたらしく、態と微笑ひで、

「何だか斯う、氣がわく／＼してゐましてね、つい口まで煩くなつてるんで御在りますよ。先生は私なんぞが愚痴を申したつても、取上げなんぞなさる筈はありませんけども、ひよッ

とかして御氣に障る様な事が御在ましたら、何卒御勘辨を願ひたいので御在ますよ。鐵坊が彼様になりましたものですから、」と、急に調子を沈めて、「何ですか、氣が斯う變になりましたねえ。』と、一寸鼻を鳴した。

勝彌は煩擾いと思ひながらも、

「僕は何も悪く思つてなんぞ居らんです。太田から返辭が來たら、直ぐ様子をお知らせ申します。』

勝彌の語が了るか了らぬに門の耳門の開く音がして、何人かと見る中に格子戸の前に立つたのは小川水鏡だ。

「小川君、使に來たのかね。』

「さうです。』と、水鏡は格子戸の内に入る。

勝彌はお瀧が此處に居て傍から口を出す様では困ると思ふので、

「御母さん、恐入りますが、元二君に來て下さるようにお傳へを願ひます。』

「さうで御在ますか。直ぐ參る様に申聞けます。』

勝彌はお瀧が奥へ行くのを見送りながら、

「御苦勞だつたね。まア上りたまへ。』

水鏡は怪幻な顔を爲て見廻しながら、

「久能木先生、玄關に机を置いて居らッしやるんですか。』

「當分玄關番を爲るんだ。』

「如何してですか。』

勝彌は笑出して、

「病人があるのに、家が狭いからなのさ。紫煙君の手紙でも持つて來て呉れたのかね。』

「さうです。手紙を持つてまわりました。』と、懷裏から封状を取出し、勝彌に渡しながら「金が入つてるさうですから、請取を戴いて來いと云ふ事でした。』

「さうかね。』

勝彌が封を開かうとした時元二が來た。

「元二君、小川君に茶を持つて來て呉れたまへ。』

「はい。」

元二は二言三言小川と挨拶を交して茶の間に茶を取りに来ると、お瀧は待受けて居て、

「元二、太田さんからお金が出来たようだったかい。」

「如何だか。小川君に茶を呉れろって先生が仰有るから、茶を注いで下さい。」

お瀧は茶碗に茶を注ぎながら、

「小川さんは手紙でも持つてお入でなのかい。」

「手紙は來てる様だ。」

「其中に屹度お金が入つてゐるんだよ。」

「如何だか。」

元二が茶を持つて玄關へ行つて見ると、勝彌は手紙を廣げて凝乎と見詰めて、屹度口を結んで考へて居た。封筒は机の上に置かれて、何物か入つて居るだけの厚みに尙ほ膨れて居た。

水鏡は元二が進めた茶を一口飲んで、考へて居る勝彌の横顔を見ながら、

「宅の先生も然様云つてお居でいた。蒼川君の氣性を知つてゐるから、實に氣の毒でならない。でも、先方の條件を承知しなきゃア、此方の要求を容れて呉れないものだから、蒼川君の感情を害するかも知れないと思つたけれども、實に止むを得んかつたんだと云つてお居でいた。」

勝彌は嚔て太息を吐いて、

「元二君、久能木は尙だ駄目だね。」

「如何してですか。」と、元二は眼を瞬つた。

「自分の書いた作物が、自分の名だけでは賣れないんだから情ないぢやアないか、駄目ぢやアないか、もう小説を書く事は止めた。自分の名で自分の作物が賣れない様ぢやア、作家として零だからねえ。僕の名はかじぢや不可い、紫渡君と合作の名にしなきゃアと云ふんだからねえ。元二君、勝彌は未だ駄目だよ。」

勝彌は穏かな語調で斯う云つたけれども、其眼には潤が見えた。元二は其涙を見ると胸が一杯になつて垂頭した。

「先生、先生が失望なさる事がありますものか。」と、水鏡は御世辭でもなさうな語調で、「宅の先生と先生とは比較にならないですよ。宅の先生が前に世に出てお居でなさるから、虚名は先生の上にあるですが、實際の技倆は到底比較にならないですからなア。」

勝彌は耳にも入れない様子で、元二は尙ほ垂頭して居た。

「先生、其は僕の一家言では無いんですよ。世評が然様なんです。ですから、先生の御作に宅の先生の名を加へなきやア不可いと云ふに到つては、僕にしても憤慨に勝へんです。雑誌社編輯人だとか、書肆だとか云ふ奴等の眼に、作の鑑識が出来て溜るもんですか。先生、僕は御世辭を云ふんでも何でもありません、知る人ぞ知るですから、先生が悲観なさる事なんかありアしません。」

勝彌は苦笑を爲ながら、

「何にしても蒼川と云ふ名が、世に認められてないのは事實なんだからねえ。」

「そんな事があるもんですか。」

「いや駄目〜。」と、手紙を巻納めて居る。

「宅の先生には悪い癖があるですからなア。」と、水鏡はにやり〜笑ひながら、「宅の先生は虚榮心が強いから不可いですよ。他の名でまで自分の名を賣らうてんですからなア。」

「つまらない事を云ふものぢやアない。」

「ですけれども、事實なんです。誰方が無いですよ。今日の先生の原稿の事に就いても、僕は大きいに疑つて居るんです。僕が思ひますのには、」

「もう止したまへ。」

「ですがね先生、」

「止せと云つたら止さないのか。紫瘦君は君の恩人ではないか。恩人を漫りに誹謗する様な男は僕は嫌ひだ。」

勝彌の平素の氣質を知つて居るので、水鏡は終に口を噤んだ。

勝彌は紫瘦の手紙を見ると共に、紫瘦と合作の銘を打つほどの耻辱を忍んで迄も、自分は柏木一家の爲に調金せねばならぬのであらうか。僅かに一度にしても紫瘦の名に依つて原稿を賣つたとすると、一生拭ふ事の出来ない耻辱になるのである。久能木蒼川なる名を

葬つてまでも、此場合調金せねばならぬものであらうか。死して葬られざらんとする幼き人——最愛の美都子の弟の爲に、我れ蒼川の名の上に終生拭ふ可からざる耻辱を受くべきものであらうか。鐵三には父もあり叔父もあり、彼等が必死の決心を以つて調金に奔走したら、質素にせば十金にても足べき葬儀の費用を、調達し得ないとは信せられぬ。一家の人が唯自分を當にして——寄掛れば如何でも調金して呉るものとして自分を當にして居るから、必死の決心を爲し得ないのだ。調金に奔走しないのだ。此等の人々の犠牲になつて、好んで自分を葬らねばならぬ義務が何處にあるか。乃公の名は、断じて此等の人々の犠牲になるべきものではないのだ。乃公は彼の節操なき紫瘦や此等の人々の爲に、希望に満ちた未來を有つ蒼川の名を葬るべきではない。乃公は彼の雑誌社の條件を却けねばならぬ。断じて却けねばならぬと思ひながらも、隣室に向は病床の儘置かれある鐵三を思ひ、其枕頭に涙に暮れた千代乃や美都子の意中を想察すると——清しき眼を泣腫した美都子の痛ましい面輪を思浮めると、其れ救ふ爲になら自分の名譽もものはと思ひ亂れもしたのだ。勝彌は水鏡が紫瘦を誹謗する語を聞きながらも、紫瘦の所謂雑誌社の條件なるものを容

るべきか却くべきかを思煩らつて居たが、水鏡が口を噤むと共に、何れに決すべきか、断すべき時が其處に迫つた様な氣がするのであつた。

勝彌は卷納めた紫瘦の手紙を机の上に置いて、凝乎と見ながら太息を吐き、

「元二君、蒼川なんて世に認められてない名なんか如何でも可いから、名を捨て、原稿を賣る事に爲るよ。」と、机の抽匣から巻紙を取出した。

元二は顔色が眞青になりながら、

「先生、其様事は爲さらないで下さい。僕の家を救つて下さる爲に、先生の御名をお捨てなさるなんて、其様事を爲すツチャ不可せん。先生の御名と、僕の一家とは比較物にもならないんですよ。僕の一家の爲に先生に御名を捨てさせては、僕が濟みません。僕の家が今日の境遇に陥つたのは、陥るべく自ら求めたも同様なんですから、先生に御名を汚させてまで救つて戴いては濟まないんです。自ら求めた禍を先生に嫁して、其で可いとは僕は濟して行かないんです。先生、原稿は御取返しなさる様に願ひます。鐵三の始末位は、一家の者が出来るだけの事を爲たら、たとへ裸にならうとも、」

「元二君、君の意中は能く解つてる。もう何にも云ひたまふな。君が僕の名を尊んで呉れる今の話だけで、僕は名を捨てても惜くないと思ふ。若川と云ふ號は此に最期を遂げても、久能木勝彌は生きて居るんだよ……小川君、受取が入用と云ふ事だつたね。」

「唯御受取だけで可いッて事でした。」

勝彌は巻紙に受取書を認め、

「では、之を持つて歸つて呉れたまへ。紫瘦君に、御盡方を謝してたと云つて呉れたまへよ。君も實に御苦勞だつたね。何れお禮は爲るよ。」

水鏡は領收書を受取り、

「僕なんか如何でも可いですが、先生に御氣の毒でならないんです。彼社では、先生の御原稿を非常に懇望して居たんですから、先生の御名だけで引受けなッて事は無い筈なんですよ。だから僕は不思議でならないんです。」

「其様事はもう如何でも可いんだ。僕は紫瘦君を信じてるよ。君も漫に恩人の名を口にする事は慎みたまへよ。奥さんへも宜しく云つて呉れたまへ。今日は取込んでるから、此

で失敬する。ごうも御苦勞でした。」

水鏡は辭し去らざるを得なくなつて辭し去つた。

勝彌は机の上なる封筒を取上げて元二の前に置いて、

「元二君、其封筒の中に金が三十圓入つてるから、御母さんへ上げて呉れたまへ。此金を得た事情は、君が見聞してた通なから、御母さんにも其を含んで居て戴いて、萬止むを得ざる費途にはかし費つて貰ひたいんだよ。鐵ちやんの葬式にしても、成だけ質素にして、多少かは御母さんの手に残して置いて貰ひたいと思ふんだよ。僕から云ふと角が立つから、君から御話を爲て置いて呉れたまへ。」

元二は勝彌が名を捨てまで、自分一家の爲に盡して呉れる厚意に感激して、先刻から涙を止め得ないで居た。

「先生、幾分拜借すれば充分だらうと思ふんですから、其中五圓でも十圓でも、」

「なに可いんだよ。此盛御母さんへ上げて呉れたまへ。僕はね、君と美都子さんと、それから鐵ちやんと三人の爲に盡すのだと思ふと、名なんか如何でも可い。若川の名を葬つて

も悔いなき意だよ。』

元二は何とも云ひ得ないで、暫時は涙をほろ／＼零して居たが、應て封筒を取上げて、
「御祖母さんと相談した上で、母に渡す事に爲ます。』

「其様に爲なくつても可いよ。』

元二は座敷へ行つた。

勝彌が紫瘦の手紙を寸断々に引裂いて居ると、座敷から千代乃の涙を含んだ聲がきれ
ぎれに聞こえた。

「……御親切を無に爲ては悪からうから、母さんにお上げなさい……私からも母さんへ
能く云はうから、お前からもお云ひが可いよ。』

元二が何か之に答へたけれども、能く聞取れない。が、元二は直ぐに茶の間へ行つた様
子だ。

「……此御恩は御前が御報しでなきやアなりませんよ。』

千代乃が斯う云ふと、はいと答へた美都子の聲も聞こえた。その幽な、能くは聞取れない

ほど幽な唯はいと云つた此一語が、勝彌には此上も無い慰藉で、若川の名を紫瘦の名に駢
べられる耻辱も、此人の爲に受けるのなら、敢へて苦痛とするに足らないと思つた。

茶の間に仰々しいお瀧の聲が爲たかと思ふと、早く此方に來る足音が聞こえて、お瀧は
元二を前に立て、玄關に入つて來た。

勝彌がお瀧を見上げると、満面の笑に相好を崩して、坐らない中から仰々しい語調で、

「先生、何と御禮の申上げ様も御在ません。御蔭さまで助かりました。彼兒も先生が居ら
ッしやるばツかして、立派な葬式を出して貰へて、何様に喜んでるか知れませんかよ。先生、

此御恩は一生忘れは致しません。私だけで御恩報の出來ないところは、元二や美都子に致
させます。本統に此様難有い事はありません。元二や、お前からも能う御禮を申してお
呉れよ。』

「なに、其様に禮なぞ云つて下さる事はありません。僕は唯現在の僕に出來るだけの事を
爲たと云ふ迄なんです。恩に被て戴かうなぞと云ふ意はありません。』

「先生の御氣性では、然様で居らつしやいませうとも。他に恩を被せやうなんて、其様事を

思つて居らッしやらないのは、それは能く解つて居ますよ。ですけれども私の方では御恩に被ない譯にはまかりません。此御恩は何様事がありましたも、決して忘れは致しません、一生御恩に被なきやアなりません。元二や、お前からも能く御禮を申上げて下さいよ。』

元二は母が喋々喋るの可厭でならないから、唯垂頭いたまへて居た。

其處に重勝が歸つて來た。風呂敷包を抱えた手には櫛さへ持添へて居た。

『所天、大層手間が取れましたのねえ。何處まで行らッしやつたんですか。』

『手間が取れるのは當然ぢやアないか。方々賤い物を探して買つて來るんだから、さうぢよつくらッて譯にや行かないや。』

『大きに御苦勞さまでした。まア坐つて頂戴。』

お瀧は重勝を坐らせて置いて、勝彌が三十金と云ふ大金を調達して呉れた事を話して、

『所天、先生の此御恩を忘れないで下さいよ。ねえ能う御在んすか。』

重勝は見ともないほど頭をちよこちよこ下げながら、吃調子の早口で頻りに禮を述るのであつた。

沈み切つて居た一家に稍活氣が出て、親戚へ報知する近所の寺から僧を迎へる、葬具屋へ走ると云ふ鹽梅で、誰も手際が無い様に忙しくなつた。

(三六)

鐵三を葬つて未だ僅かに十日とは経たないのに、お瀧の手元はもう苦しうで、其様子が勝彌にも察せられるほどだ。勝彌は其様事は無い筈だと思ふ。

質素にくと注意して、葬式の費用は十金前後で済んで居る。平生は疎遠しく爲て居た親戚からの香奠も尠からず集つて、葬式を償ふて餘あるほどであつたから、勝彌が其名を捨て、得た三十金を加ふれば、儉約さへすれば一ヶ月位は支へ得られぬ事はない筈だと思つて居た。それなのに、既う手塞つて居る様子だから、勝彌は不思議でならない。亦例の浪費したのではあるまいかと思ふ。眞逆に其様事もあるまいと思返しても見る。けれども、お瀧の手元の不如意なのは相違もない事實で、或日の夕方などは、元二が母と争つて先生

に申譯が無いと云ふのをさへ聞いた事があつた。

勝彌は當分小説に筆を着けまいと思ふ。随つて入金目的が無い。入金がないのに此家に同居して居る譯には行かぬ。引拂ふより外は無い。けれども、此家を引拂ふのは苦痛だ。——美都子に別れて此家を去るのが此上も無く苦痛だ。山田から此家に轉宿したのも美都子の爲なら、其後の萬事が總て美都子の爲に働いて居たのだ。それなのに、今一旦にして去らねばならぬとは、此程の苦痛があらうか。去りたいと思ふけれども、美都子を捨て別れる決心が着かない。今別れても、他日一家を爲した時に、美都子を貰ふ約束を爲て置くのも可なりだと思ふと、それとして一時此家を去つて見る氣にもなる。けれども、今其様未練らしい事を云つては、唯美都子の爲に盡したので、他の窮狀に同情して爲たのではない事になる。實際自分は美都子の爲に盡したのだけれども、唯それだけであつては自分ながら疚くて、美都子を貰ひたいなぞとは云へない。如何したものであらうかと思迷ふのみで、何と決心も爲し得ないので、乃公は如何して此様に意氣地が無いのであらうと腹立しくも思ふ。

今も座敷の机の前に、徒空然と煙草を喫んで居ると、茶の間で千代乃が何か云出した。而も涙聲だから、勝彌もつい耳を澄した。

「……今度と云ふ今度は、元二だつて先生にこんな御話が出来やしないよ。お前さんは何だつて重勝の云ふ事ばかりをお聞きなんだらうね。それはぬ、夫婦であつて見れば、夫に従ふのが妻の務ではあらうが、先達の事をお考へだつたら、今度のお金までも重勝の自由にお爲せの事は無い筈だよ。それをお前がはいくと出してお了ひだつたのは、お前も悪いんだよ。重勝ばかりを悪く云ふ事は決してありません。私は第一お前が悪いと思ひますよ。元二だつて可愛相だよ。先生に其様事を云はせるのは止して下さい。先生は彼様方だから、御話さへすれば何にか爲て下さるかも知れないけれども、義理としてもお話は出来ませんよ。お前さん達夫婦は其様だし、長夫は彼様だし、私は實に情なくなるんだよ。元二と美都子だけは、何時までも先生の御世話を願たいと思ふから、お前さんも氣を付けてお呉れで、先生が厭氣をお出しなさる様な事を爲てお呉れでないよ。だからね、今度だけは先生に御迷惑をお掛け申さないで、重勝に都合を爲て貰つてお呉れ。何様さうしてお呉

れ。」

千代乃の語は断れたが、お瀧の返辭は聞えないのである。

「母さん、」と、今度は元二の聲で、「僕には到底先生には願へないよ。それに何ぢやアないか、鐵坊の時に都合して下すつた金に就いては、先生は御自分の名を捨て都合して下すつたんだよ。其事は、其時僕が母さんに話したでせう。先生が其程の苦心を爲て下すつた金だから、注意して使つて下さい、浪費しない様にして下さいって、僕は母さんに彼様に頼んだでせう。それなのにもう無い、父さんがまた相場に手を出して無くして了つたって云ふんでせう。父さんも母さんも、彼金を其様事に費すつて、其で先生に濟むと思つてるんですか。え、母さん、如何なんだよ。先生の御苦心も何とも思はないで、僕が頼んで置いても平氣で浪費すつて、また先生に願つて呉れなんて、母さんは能く其様事が云へるぢやないかね。僕は如何したって、また先生へ御願ひするなんて事は出来ないよ。父さんと母さんとで、勝手に其様事を爲て勝手に苦しんでるんだから、其を救ふ道だつて二人で考へる方が可いんだ。僕はもう相談に乗らないから、然様思つて下さい。」

元二が立つて臺所の方へ行く足音が爲たのは、裏へでも出る意らしい。

「何か云ふと直きに理窟で遣返すんだから困すつて。」と、お瀧は斯う獨語らしく云つて、

太息を吐いて、「本統に困すつて。」と、大きく云ふ。

「お困りだつて、今度は重勝に工面をお爲せが可いよ。」

千代乃が斯う云つた後は話が断れて、何人の聲も聞こえなくなつた。

「また僕に金策を爲せよう云ふのは、随分強の好い話だ。」

勝彌は覺えず斯う吐き、突と縁側へ出て見ると、六月初旬の空は曇つて蒸暑く、今にも

雨が來さうである。

「空でも舞れてたら、いくらか心地が直るんだけれど。」

柱に背を滑らせながら蹲んで縁側に臂を据ゑ、雨の膝を雨の手で抱えて、頭を柱に支へ

させるまで仰向き、半眼を閉ぢて凝乎と考へて居た。

「どうも去つた方が可いようだ。乃公は今差當つて調金の當は無。金が無ければ此家に

厄介になつては居られぬ。今日までに此家に入れた金額を算へれば、今年一杯の宿料にも

尙ほ餘るだらうと思ふ。けれども、其様事に拘泥つて居るのは乃公は嫌ひだ。入金する時には乃公が満足して——満足と思はない迄も入れべきものと思つたのだから、今更其様事に拘泥つて、進退を決しかねる様で何する。乃公が此家を去らうとするのは、金の問題ばかりではない。心と心で相救ふと云ふ事が、此一家の人々の間に行はれさへすれば、乃公は此上何程苦痛しようとも厭はぬ。其が然様で無から可厭氣がさすのだ。日外やの美都子の母の語——自分を指して「晩か二晩か睡い思ひをすれば金が取れる人と言つた語を思ふと、今でも其意で居るらしい。乃公が涙を吞で、名を捨て、僅かに得た金さへも、やはり其意で浪費して了つたではないか。其意で押されたら、乃公は到底勝へ得られるものでない。乃公は何でも去るより外に手段は無い。それにしても、勝へ難い苦痛は美都子と別れる事だ。如何にせば美都子と別れる事が出来ようか。去るべく決心しながらも躊躇するのは、此事あるが爲だ。乃公の心を美都子と別れさせるには、如何したら可からうか。唯別れる、別れて了はうと思ひ捨てさへすれば可い。何でも無い事だ。唯別れて了はうと思ひさへすれば可い。迷ふ事も何も無い。唯別れようと思ひするだけで可いのに……それが出来ぬ

乃公だとは思はないのに、何故決し得ないのか。乃公は駄目だ。此に到ると乃公も紫瘦と同一だ。あゝ乃公は駄目だ、駄目だ〜。

座敷の唐紙を靜かに開けた者があるので、勝彌が見返ると其は美都子で、手にした盆の上の勝彌の湯呑から、白い湯氣が漂ふ様に立ち上つて居る。

「先生、お茶を注いでまゐりました。」

美都子は親い調子で斯う云ひながら勝彌に茶を進めた。

「難有う。御祖母さんの御指圖でせうね。」と湯呑を取上げた。

「御祖母さんは裏へまゐつて居りますの。」

「御母さんは茶の間にお居ですか。」

「いえ、臺所で何か用を爲て居りますのですが、御用なら呼んでまゐりますは。」

「いえ、用は無いのです。」

千代乃もお瀧も茶の間に在ぬからには、美都子が心付いて乃公を慰める爲に茶を入れたのであらう。と思ふと、勝彌は嬉しくてならぬ。今しも此家を去る事に就いて、美都子に未

練が残りながらも断じて去らうと殆んど決心し今、美都子の此優しい情を見るのは辛い、決心も鈍つて了ふ。お瀧は如何であらうとも、美都子の爲に踏止まりたくも思ふ。乃公が美都子を思ふ心の火は、邪魔となるべき何物をも焼盡して、初一念を達せでは止まぬと、曾て心に誓つた事があつたではないか。それであるのに、乃公は今美都子を捨て去らうとして居る。其時の心の誓を破らうとして居る、反故に爲ようとして居る。美都子と誓つたのではない、自分の心一つに誓つただけでも、それをむさく破らうとして居たのは、何と云ふ弱い意志であらう。乃公は如何であらうとも初一念を驕へしてはならぬ。一旦斯うと思つた事は通さでは置かぬ。何等の邪魔があらうとも断じて美都子を得ねばならぬ。必ず美都子を得て見せる。それには、此家を去らずして手段を講せねばならぬ。此家を去らぬとすれば、今後如何にして宿料を入れべきか、先づ第一その手段から講じて行かねばならぬ。當分小説を書ぬとして、さて何に依つて入金の道を開いたものかと考へると、何一つ此ぞと云ふ目的も手段も無いのである。

勝彌は失望の太息を吐きながら美都子を見ると、いつも茶を進めれば直ぐに退く美都子が、今日は不思議にも其儘其處に坐つて、伏目になつて居る様子が、平生より一入美しくも亦哀にも見えた。

「乃公は如何しても此人を得なきやアならない。」
斯う呟いた時、不圖氣が付たのは、自分に對する美都子の意志である。之を知るのが先決問題だ。それにしてからが、何と談話の端緒を開いたものだらうと、暫時はまた其語を尋ねかねて居た。

「美都子さん、僕はね、貴方とも別れなきやならないかも知れないよ。」
「え、」と、美都子は吃驚して眼を睜つて、「何處かへ御旅行でもなさいますの。」
「いえ、旅行するのではないんです。」と、勝彌は苦笑を爲ながら、「貴方のお宅に御世話になつて居られない事情が發つたんです。」

「えッ、宅にはもうお居でなさらないので御座いますか。」
「事情が許さなくなつたので、止むを得ず轉宿しようと思つて居るんです。」
美都子が睜つて居る眼の中には潤が見えた。

「僕は隠さないで云ひますが、僕は貴方に對して大なる希望を懐いて居たのですよ。けれども、今となつては其も既う……。」

語を斷つて太息を吐いた。

美都子の頬には涙が流出した。

「美都子さん、僕は隠さないで云ふが、僕は僕の思ふ通りに貴方を教育する意で居たのです。だから、僕が此家に来ると、直ぐに何處かの學校へ入れたいと思つたのだ。元二君から貴方の所思を聞かせると、貴方は學校へ行くのは可厭だと云ふ事だから、不完全ながらも僕が教育する意で、今日まで遣つて來たのだけれども、それももう出來なくなつて了ふんだから、實に残念でならないんです。」

美都子は垂頭して涙を拭いた。

「美都子さん、僕は貴方に聞きたい事があるんだが。」と、暫時躊躇しながら、「貴方は僕の事に就いて、御祖母さんか兄さんかから聞いた事は無かつたんですか。僕が此家に来るとになつた前後に、僕の事に就いて——貴方にも關係してはすよ——何か聞いた事は無かつた

ですか。美都子さん、今日となつては僕も隠さないから、貴方も隠さないで云つて下さい。僕は貴方の語一つで、今後の去就を決しようとして居るんだから、些も隠さないで話して下さい。美都子さん、貴方僕のお解りでしたか。」

美都子は涙を拭きながら首肯した。

「いや、隠さないで話して下さい。御祖母さんか兄さんか何か話された事があつたでせう。」と、勝彌はわれを忘れる迄に興奮して居た。

美都子は云淀みながら、

「別に聞けた事はありませんけども……。」と、後を残しながら語を切つた。

「何にも聞いた事は無いと云ふんですか。御祖母さんからも、兄さんからもですか。」と、勝彌は失望したばかりでない、今まで瞞されて居た様にも思はれて口惜くてならない。

「兄からは何にも聞いた事がありませんけども……御祖母さまは私に……。」と、また云淀んだ。

勝彌は覺えず膝を進めて、

「御祖母さんが貴方に、貴方に何と云はれたのです。美都子さん、隠さないで云つて下さるんでせうな。」

「はい。お前は先生に永く御世話を願はなきやアならないから、何様事があつたつても先生に……父さんや母さんが先生と仲達をお爲の事はあつても、お前だけは決して、先生に異つた様子を御見せ申す事はならないツて、つい先日、昨日も然様申されたので御在ますよ。」

美都子は斯う云つて、涙の眼を睜りながら氣遣はしさうに勝彌を見た。

勝彌は今瞞されて居たかと口惜しかつた意は忽ち和らいで、尠くも千代乃のみは美都子を自分に與へる意であつたかと限なく嬉しくも思つた。

「美都子さん、貴方は御祖母さんの其語を、如何聞いたんですか、如何思つてお居たのですか。隠さないで、遠慮しないで、貴方が思つてお居たの通を話して下さい。貴方は如何思つて居るんですか。」

「私、御祖母さんの命令通に致します意で居りましたの。」

「御祖母さんの命令通にですか。僕が貴方の父さんや母さんと仲達を爲ても、」

「はい。」

「それは隠さない貴方の心でせうな。」

「はう。」

勝彌は夢かどばかり嬉しかつた。けれども、尠ほ決しかねて太息を吐いた。

美都子が物心覺えてから、父母に昵懇の人や、元二の友人や常に我家に入りました者は随分多かつた。けれども、一人として頼になりさうな者は無かつたのである、千代乃も然様云へば美都子も然様思つて居た。そればかりではない、動すれば養女などの名の下に金に替へられかねない境遇に、薄氷を履むの思を爲た事も一度や二度ではなかつた。御祖母さまの保護がなかつたら、自分は疾に柏木の娘では居られなかつたかも知れぬと、美都子は幾度か戦慄した事もあつた。で、今では勝彌を唯一の自分の保護者と信じて居るのだから、勝彌に今我家を去られるのは、自分が再び不安の境遇に還るので、實に心細くてならぬ。如何かして尠ほ勝彌に居て貰ひたい。自分の仕向一つで、勝彌を此處に止め得らるゝ

なら、何様な事を爲ても厭はぬと迄思つて居る。

勝彌は美都子の意中の幾分を知り得たのは嬉しいが、唯此だけで依然柏木家に留らうとの決心は爲しかねたのである。自分が彼の両親と仲違を爲ようとも、彼は自分に對する態度を變へないと云つて居る。父母が彼通の人達だから、心細さに彼様な事を云のであらう。祖母の教に依つて自分を頼みに思つて居るのであらう。唯それだけであつて、彼自身の心から發つて何物も無いのだ。美都子が乃公に對して、何様の意志を持つて居るかとの一段に思到ると、漠として捕ふべきものが無いではないか。無意味ではないか。乃公は此様無意味な事に對つて、やきもき氣を揉んで居たのか。と思ふと馬鹿／＼しい様な氣もする。

けれども、永く御世話を願はなければならぬと千代乃が云つたと云ふ、美都子も其意を承けて父母にも背くほどの決心を有つて居ると云ふ……彼千代乃の語と美都子の此心とを如何に解釋すべきか、差當つての問題ではないかと、勝彌は斯う思返して疑乎と考へて居た。

勝彌は暫時してから、

「美都子さん、僕は實に残念だと思ふけれども……。」

「ヤッばし他へ轉宿ツしやるんですか。」と、美都子は頼なる／＼に云ふ。

「さう爲なければなるまいかと思つて居るんです。僕が愈々然様する事になるとですな、僕の半生の希望は此に破れて了ふのだから、僕は實に残念でならないんですよ。僕は今まで貴方に云はなかつたけれども、僕は貴方を終生同様の友だと思つて居たんですよ。此様事を云ふと、貴方は變に思ふかも知れないが、それは元二君からの依頼だつたんですよ。其が御祖母さんの希望だと云ふ事ですね。」

勝彌は元二が美都子を貰つて呉れと云た其當時の事を簡單に話して、

「……だから、僕は貴方を學校に入れたり、自分で教へたりして、貴方を僕の理想通に仕立上げて、僕の同様の友と爲ようと思つて居たんですよ。それが今では……僕が此家を去る事になると、其希望は全然破れて了ふのです。だから、僕は残念でならないんだ。僕が此家に来てから、彼此半年近くなるんだが、僕は其間其希望の爲に生きて居たんだのに、此様羽目になつて、實に残念でならないんです。」

美都子の眼にはまた涙が溢れて、幾度か口を開かうとしては躊躇つて居た。勝彌は語を繼いで、

「貴方は知らなかつたらうが、僕は今話した通の希望を有つて居たんですよ。」

「ぢやア、何ですはね、」と、美都子は懸命の思ひで斯う云つて、尙ほ暫時躊躇つた後で「今では既う、其様思召は御在なさいませぬのですね。」

「いえ、其様事は無い。僕は今だつて其希望を捨てたのではありません、唯事情が許さなくなつたんです。だから、僕は別して残念なんだ。」と、勝彌は太息を吐いて、「僕は今では金を得る目的が無くなつたんですよ。貴女の前で、此様事を云ひたかないけれども、僕が此家を去らなきやならない第一の事情は其なんだ。僕は廻りやんが御死にの時に……いや、此様事を貴女に話すんぢやアなかつた……兎に角僕は當分小説を書かない事に爲たんです。尙ほ修養を積むまでは小説を書かない意だから、何を爲て生活しようとの目的も皆無なんだし、僕は此儘平氣で御世話になつて居る事が出来ぬ。僕は止むを得ず此家を去らなきやアならない、貴女とも別れなきやアならない、随つて希望も捨てなきやアならない事になつたん

です。だから、僕は残念でならないんですよ。」

美都子は勝彌が第一に擧げてた入金目的が立たないと云ふ事の外に、自分の両親に對する悪感情の方が却つて重いのかも知れないと思つて居る。それは祖母も口癖の様に云つては心配して居た事なので、自分も母が彼様で無かつたらと熟く思つた事もあつたのである。今勝彌の話を聞くと、一入母が怨めしい様にも思はれる。

「先生が他へ行らつしやつたら、御祖母さんが何様にか力を落しますでせう。」と、はらはら涙を零した。

勝彌は然様であらうと思ひながら黙つて居た。

「私も何で御在ますは、先生が居らつしやらなきやア、また種々な人達が入りする様になつて、また清水とかへ養女に行けつて云はれるかも知れませぬですから、」と云掛けてはほろりと涙を零しながら、後を云はう云はうと爲て云へない様子だ。

勝彌は美都子が唯自分を頼と爲て居る事も知り、自分が去るのを其一大事と悲んで居る事も知り得た。既に其と知つた以上は、自分も亦其に應ずるだけの考を爲ねばならぬ。

さて其には如何したものであらうかと、疑乎と考へて居る。

「先生、先生が他へ轉宿ッしやる事は、御祖母さんや兄さんにも、既う御話があつたので御在りませんか。」

「いえ、未だ御話は爲ないんです。」

「御祖母さんが御聞きでしたら、」とばかりで、顔に袖を當て泣くのだ。

「美都子さん、」と、勝彌は稍躊躇いながら

「僕は貴方に聞くが、貴女は僕と共に永く居る、終生同棲しても可いと云ふだけの決心があるのですか。」

美都子は袖を顔に當たまゝ首肯した。

「貴方に其決心があれば、僕にも決心する所があるんですが……美都子さん、貴女は僕が何様逆境に立つても、僕と同棲の約を結んだのを悔いしないだけの決心があるんですか。」

「はい。」と、美都子は袖に顔を埋めたまゝで答へた。

勝彌は太息を吐いた。

「貴方が其決心なら、僕は非常に満足です。併し、僕は貴方が知つてゐる通の貧生だから、貴方を直ぐに引取つて家庭を作ると云ふ譯には行かないんだ。それは貴方も承知して居て呉れるでせうな……よし、家を持つて同棲になるとしてからが、僕は貴方を幸福にする事は當分出來なからうと思ふ。僕は出来るだけ修養もする、奮闘もする覺悟だけれども、貴方を幸福に爲る迄には、容易に到り得ないと思ふんです。だからね、貴方も僕と同棲になれば、貧苦と闘はなきやアならない、食ふや食はずの境界に甘んじて貰はんやアならないですが、貴方は其も耐忍して呉れるかね。」

美都子は何時か顔から袖を除つて、勝彌の顔を熱心に見て居たので、今勝彌に疑乎と見られると鼻白みながら、

「私何様境界にたつて辛棒致しますは。」

「貴方は、其も辛棒して呉れるかね。其決心があれば僕は幸福なんだ。併し、斷つて置くがね、僕は何様苦しい境界に墮ちようとも、人の道でない事を貴女に強る様な事は決して爲ない。此だけは確と誓つて置くですよ。貧には苦しめるかも知れないけれども、其他の事

で貴女を苦しめようとは思はない。貴女と二人で、大道に物を賣る迄の苦境は忍んで貰ふかも知れないが……貴女は其迄の辛棒が出来るかね。」

「貴方の爲さる事なら私どんな事を致しても厭ひませんは。」と、はつきりと云つた。

勝彌は此處まで美都子の意志を知得たのは、此上も無い満悦である。けれども、尙ほ此儘此家に居るのが可いか、一時たりとも此家を去つて、時機を見て美都子を迎へるのが得策か、何れに決すべきかの問題が尙ほ残つて居た。

「美都子さん、貴方の意志も僕に解つたが、僕の意中も貴女に解つたでせうな。」

「はい。」と、美都子は顔を赧めながら垂頭いた。

「御祖母さんや、貴女の御両親が、此事を承諾なさるでせうか。」

「御祖母さんは御喜びですは。」

「父さんや母さんは如何でせう。」

美都子は幽ながらも眉を顰めて、

「御祖母さんが承知さへなされば、父さんや母さんは何にも申さないでせうよ。」

「或は然様かも知れない。けれども、出来るものなら、父さんや母さんの承諾も得て置きたいのです。元二君から先づ御祖母さんに話して貰ふ事にして、」

美都子は俄に不安の色を浮めて、

「兄さんからばかしてない方が能う御座んすでせう。」

「僕に直接に云へつて云ふんですか。」と、勝彌にも有聲に難色が見えた。

「兄さんがお祖母様よりか前に母さんに御話しですと……。」と、母は支へるかも知れないこの意を含めながら勝彌の顔を見た。

「それも然様です。では、僕が御祖母さんに御話する事に爲ます。其上で、僕が此儘尙ほ御世話になつてるか、一時他へ轉ずるかを決する事に爲ませう。美都子さん、僕と貴方は、既う昨日迄の貴方と僕とでは無いんだから、二人は其覺悟で進なきやアならないんですよ。僕は充分決心してるから、貴方も一層堅い決心を以つて當つて呉れなきやアならないですよ。」

美都子が唯と答へた時、茶の間で忍びながらの咳が爲たのは、千代乃が何時か屋後か

ら歸つて來て居たらしい。

(三七)

勝彌と美都子の間には同棲の約が結ばれて、如何なる苦境に立たうとも、互に此約に背くまいとの誓が交されたのである。

で、勝彌は直ぐにも千代乃に其意を通じて、其許を得て置かねばならぬ。二人の談合を千代乃が偷聽て居たらしいから、話出すのに多少便宜がある様にも思はれたが、直接に相談を任掛けると云ふのは何となく氣怯が爲る。何故乃公の心は此様に女々しいだらう。斯うと決心した上は何者をも避けない。美都子を得るに就いては何様邪魔があらうとも、乃公は其を排除け燒盡して、必ず成効すると誓つて居たのではないか。それなのに、何故此様に氣怯が爲るのであらう。此様女々しい心か何ぞ出来るものか。斷じて行へば鬼神も避くと云ふではないか。況て、美都子の御祖母さんは、乃公に美都子を嫁りたいと先づ云出し

た人ではないか。美都子を戒めて、父母にも替へて乃公に従へと教へた人ではないか、其人に對つて何の遠慮があらう。何の氣怯する事があらう。茶の間に御祖母さんが一人居られる時を見合せて、今日の内には是非話を爲て置かねばならぬと、唯其機の來るのを待つて居た。

其日は夜に入つても、其機會が見出されなかつた。と云ふのは、茶の間には重勝夫婦と千代乃元二等と相對して、明朝にも迫つた家計の窮乏に就き、其手段の上に意見を異にした爭論の場となつて居るからだ。

元二は今度と云ふ今度は如何に窮迫うとも先生に救助を乞ふ譯には行かぬ、第一其様事を口にした義理であるまいと、父母に對して一步も譲らない。千代乃も元二の云ふ所を道理ありとして、お瀧の不心得を論ずるのであるが、お瀧は容易に其に服さない。理窟には服しても、實際差迫つて居る活計を如何したら可いのですかと、實際問題を楯にして争ふのだ。

重勝にしる長夫にしる、去來と云ふ時に間に合ふほどの才能がある様なら、何も好んで

他に頼らうとは思はないけれども、今の場合背に腹は替へられない。前の義理が如何の斯様のご其様詮議に空しく時を費しては居られない。元二が先生に相談を爲るのが厭なら、私が直接に御相談を爲ても可いときで、お瀧は争ふのだ。重勝は例の煮切らない語調で、時々ぐぐぐとお瀧に聲援するのである。

茶の間と座敷とは僅かに唐紙一重を隔て、居るのだから、勝彌は人々の争論の始終を、殆んど漏さず聞得たのである。けれども、態と聞こえない振を爲て居た。なまじ口を出したところで、自分にも今如何にして調念しようかとの手段が無いから、其争論の渦中に捲込まれないで、何とか出来るだけの工夫を爲て見ようかとも思つて居た。

夜も九時近い頃になつた。茶の間では尙ほ折々争論の聲が聞こえた。

「……父さんが父さんらしい才能があれば、何人も人を頼に爲やアしないッて先刻も云たぢやアないかね。」

お瀧の鋭い調子が聞こえる。

「だって、先生が居らッしやらない時だッたら、母さんは如何しようッて云ふんです……」

やッばし父さんが如何か爲なきやアならないでせう。」

元二の語調も強い。

重勝が何か云つた様だが、聲が低くて勝彌には聞取れなかつた。

「母さんや父さん見たいに先生にばかし倚掛つて居ようッてんぢや、先生だッて早晚愛想を盡してお了ひなさらア。」と、元二は斯う云つて、暫時躊躇つて居る様であつたが、「僕は實は心配してゐるんだよ。先生が頃日頻りに何か考へて居らッしやるのは、他へ行らッしやる意ぢやないかと思ふよ。」

勝彌は元二の語に覺えず首肯したが、元二が其處まで察し得たのと、自分の態度は他の注意を惹くほど變つて居たのかと驚きも爲た。

「愛想を盡されりやア、其迄ぢやアないかね。何も其様に、」

「母さん何をお云ひだよ。」と、叱る様に遮つた聲は千代乃で、「さんく御世話になつて居ながら、何と云ふ云草ですよ。元二や美都子の爲には、久能木先生に何時までも居て戴かなさやアなりませんよ。長谷の様な男だの、あの兒玉ッて人達と先生とを、お前さんは一

緒に見てお居でちやアないかい。兒玉だの長谷だの、また長夫の友達だのと先生とはね、まるで違ひますよ。兒玉なんて人は、美都ちゃんを欲いばかりで、最初は親切らしく見せ掛けて居たんだよ。長谷と来た日には、父さんを煽動ちやア種々な事に手を出させ損をさせてさ、もうお金になる物が盡きたと見込んだから、今度は美都ちゃんを金に爲ようと掛つて居たちやアないかね。清水の隠居とかへ養女に世話しようて云つたのだって、其隠居からお金を引出す爲めなんだよ。先生が居らっしゃる様になると、ばったり跡の道で、まるで寄附も爲や爲ないちやアないかね。彼様人達と先生と一緒に爲で、愛想を盡かされたら其迄だとは、何と云ふ云草ですよ。お前さんは、其様人ぢやなかつただけども、何時からか全然變つてお丁ひだつたんだよ。元二や美都子に對してもお耻ぢが可いよ。」と云つた聲は暈つて居た。

「困迫つてるもんだから、つい心にも無い事まで云つ了ふから、」と、お瀧は唯斯う云つて黙つて了つた。

勝彌は千代乃がお瀧へ對しての意見を聞く中に、何時か背に冷汗をかいた。自分は其様意

ではないけれども、兒玉同様美都子を得たいばかりで、此家にも移り、一家の人々の爲にも盡して居たのであるまいか。今度にしても、既に此家を去らうと決心しながらも、また思直したのは眞箇美都子を得たい爲なのだ。自分は其に就いて、他に些も賤しい心は有たない意だ。けれども、一步を誤れば兒玉と選ぶところが無いではないか。お瀧の語には憤慨せずには居られないけれども、千代乃の語に對しては慚愧たらざるを得ないと、耻かしい様な氣が爲た。

「母さま、今度は私がお處から都合させようから、何卒御心配なさらないで下さい。」と、重勝が云淀みながら云つた。

「其様事をお云ひなすつて、所天心當が御有りなさるんですか。」

「兎に角出掛けて見ようよ。」

「重勝、何卒さうしてお呉れ。」

「だけでも、無駄ちやアありませんか。」

「兎に角出掛けて来よう。」

聽て重勝が仕度を爲て玄關へ行くのを、お瀧と元二兄妹が送出した。

其日も夜に入つたが、重勝も歸らねば、長夫も銀行の退出掛を何處へ廻て居るのか歸宅しない。お瀧は一人でぶつ／＼云ひながら立働いて居て、如何にも機嫌が悪るさうだ。

勝彌は美都子の事に就いて千代乃と相談して置きたく、其一人の時を窺つて居たけれども、容易に機會を見出す事が出来ないで、頻りに茶の間の様子に注意して居た。

元二は今日はおち／＼と座敷に坐つた事もなかつたが、九時近い頃に勝彌の机に駢べた自分の机の前に坐つて、何やら頻りに考へて居た。

「元二君」と、勝彌は呼掛けて、「君も大分心配して居る様だね。」

「え、」と、元二はさきより悪るさうに垂頭いた。

「茶の間の話聲が能く聞こえたから、僕は大概様子を察して居るんだがね。」

「面目がありません。」

「僕に其様事を云ふには及ばないぢやアないかね。」

「はい。」と、元二は一層恐縮する。

「僕も君の知つてる様な事情で、當分小説を書くまいと決心してるし、他に金を調へる手段が無いから、止むを得ず傍觀してる様なもの、私に心配は爲て居るんだよ。」

「先生に此上御心配を願ふなんて、其様事は出来ません。先生は何卒御心配なさらない様に願ひます。」

「斯して一家に棲んでるんだもの、心配するなと云つたッて心配しない譯には行かないさ。併し、徒らに心配するだけで、僕には手段が無いから情ないんだ。」

「先生、何卒、其様事を云はないで下さい。其様事を云つて下さると、僕は實に溜らないんです。」

「君と僕との間ぢやアないか、そんなに氣に掛けないが可い。」

元二は垂頭いたまゝ、太息を吐く。勝彌には其様子が可愛さうでならない。で、何卒して調金したいと思ふが、紫瘦等と合作の名を借りなければ、雑誌に載せられるだけの信用さへ無い作家として世に立つのが羞しい。けれども、小説を書くより外に調金の手段を知らぬ身に今更何と爲様も無いので、可愛相だとは思ひながらも、尙ほ一步踏入るほどの勇氣

が出なかつた。

「元二君、」と、勝彌は聲を潜め、

「更めて聞くのも妙だし、君も變に思ふだらうかね、彼の美都子さんの一條ね。」

元二は覺えず顔を上げて、

「美都子の一條ッて云ひますら。」

「君は忘れはしないだらう。僕が此家に同居する前の事だ——飯田町の山田に居た時の事だが、御祖母さんの希望だとか云ふので、美都子さんを僕に貰へッて……君忘れはしましね、僕に然様云つた事を。」

「え、覺えてますとも。」

「御祖母さんは今だッて僕に下さるだらうかね。」

「無論ですとも。」

「確と然様だらうかね。」

「然様だらうと思ひます。」

勝彌は凝乎と考へた。

「先生、ぢやア愈よ妹を貰つて下さるんですか。」

「さ、それに就いて、考へてる事もあるんだかね。」

元二は熱心に勝彌の顔を目成た。

「御祖母さんは然様だらうけれども、君の父さんや母さんは如何だらうね。美都子さんを愈よ僕が貰ふとなつて、氣掛なのは其點なんだ。」

「父や母は如何でも可いんです。美都子は御祖母さんの自由になるんですし、父や母がよし異論を唱へたつて、何でもありやアしないんです。御祖母さんはかしぢやありません、僕だッても父や母に何にも云はせやアしません。」

「其が困るんだよ。僕は父さんや母さんにも、心地能く承知して貰はんきやア困ると思ふんだ。君、さうぢやアないか。妻の両親に始終不快の念を懷かれて居た日には、時ならず衝突する事もあらうし、結局圓滿な家庭を作つてる事は出来まいと思ふんだ。だから、僕は父さんや母さんにも、快く承諾を得たいと思ふんだ。」

「大きに然様です。併し、」と、後を云掛けて躊躇つた。

「併し何だと云ふのかね。」と、勝彌は促した。

「母が彼通ですから。」と、悄然と垂頭れた。

勝彌もお瀧に就いては、美都子と同棲しての行末に一方ならず危懼を懐いて居る。其點から考へると、美都子を貰ふのは、好んで自分の前途を葬り去る様なものだ。併し、美都子を捨ようとは如何しても思はぬ。美都子の意中を知らなかつた時でさへ、美都子を受する心の火は障礙となるべき何物をも焼盡くさうと誓つて居た。況て今は既に美都子の意中を知り得た。況て既に美都子の意中を知り得て、既に終生同棲すべく約した今になつては、最早其兩親の事から躊躇すべき時ではあるまいと思ふ。美都子の爲には乃公の前途を葬るも可なりだ。乃公の方からばかり見ないで、美都子の方からも見て遣らねばならぬ。美都子も乃公と同棲する爲には、其兩親に背いても決心して居るではないか。美都子が乃公と同棲して、彼の前途が幸福であるか否かは、未可解の問題なんだ。乃公に來ない方が、彼女の幸福かも知れない。終生浮ぶ瀬の無い悲境に墮ちようも知れない。それなのに、彼女

は乃公に來ようと決心して居るのではないか。彼女の此意志に對して乃公の今の意志を思ふと、乃公は利己的に二人の上を考へて居るのではあるまいか。之を思ふと美都子に對して恥づべきなんだ。兩親が如何あらうとも可い。美都子と同棲の目的を達し得さへすれば可い。乃公は決心した。彼の兩親なぞ眼中に置かないで、斷じて美都子と同棲する。假令何等の障礙が出來ようとも、斷じて打破つて、斷じて目的を達しなきやアならない。もうくだらない事に心を勞する事は止した。今夜の中にも御祖母さんに相談を爲て、事を決して置く事にする。

「元二君、僕は決心した。君にも頼んで置くが、萬一故障を唱へる人がある場合には、君にも力を貸して欲いだ。可いだらう。」

「無論出來るだけの力を盡します。僕だつて、妹が幸福であつて欲いんです。」

「幸福か幸福でないか、それは未來の問題なんだ。僕は今夜にも御祖母さんへ御相談する意だ。」

「さう爲て下されば僕も難有いんです。美都子も喜ぶでせう。」

勝彌も今は千代乃の意中を確めさへすれば可いと思ふので、何となく心が勇むのである。「其は其としてだね、父さんが調金に御出掛の様だったが、見込があつて出掛けられたのかね。」

勝彌が質ねると元二は顔に暈を持つて、

「父の事ですから、覺束ないと思つて居ますのです。」

「それだと云ふと、父さんは目的もなく奔走して居られるんだね。」

「然様だらうと思ふんです。」

「御氣の毒だね。嗚ぞ困つて居られるだらう。」

「ですけれども、父と母が悪いんです——不注意から此様事になつて、第一先生に申譯がありません。金さへ見れば、金の性質も他への義理も忘れて了ふんです。直ぐに兎町へ出掛けて行くんです。御祖母さんも注意すれば、僕も注意したんですけれども、さうで無い振を見せてもやア何時か出掛けるんですから詮様がありません。困るのは自業自得なんです。」と、元二は勝彌の顔を正面には見得ないまで羞ぢた體で、「父や母が彼様風ですから、先生

が美都子を貰つて下さるなんて事は、頃日では既う夢にも思つて居なかつたんです。彼様者の娘を妻には出来なかつて、先生は疾に愛想を盡して居らつしやるだらうと思つて居たんです。それなのに、先生が美都子を貰つて遣らうつて仰有るんだから、僕は嬉しい様でもありませんし、御氣の毒な様でもありませんし、何と申上げて可いか分かりませんが、唯感謝の外はありませんです。」

勝彌も元二の云ふ通、彼様兩親があつては行々面白くない事が發るに違ないと思つて居る。虚心平氣で考へたら、美都子を貰はない方が前途が無事であるに違ない。けれども、自分は何様障礙があらうと、美都子と同棲する決心で、事が發つたら發つた時の事だと思つて居る。今からよく取越苦勞を爲たつて何になるでもないから、一切自然に委せる意だ。併し、元二が心配して居たのは、妹に對する兄の情で、如何にも氣の毒だ。充分安心させて置く必要もあらうから、自分の決心を話して置く事に爲よう。

勝彌は一入小聲になつて、自分は如何なる故障があらうとも、美都子を娶る決心であること告げて、

「……併し、僕は君も知つてゐる通の男だから、何時になつたつて貧乏だらうと思ふんだ。美都子さんを幸福にする事は、或は不可能かも知れないと思ふんだ。併し、僕は誓つて置くよ、何様困迫の場合であらうとも、僕の妻として、柏木家から出た人として、世間から指弾される様な事は爲せない。これだけは安心して居て呉れたまへ。」

「生生の事ですから、何時迄今日の境界に居らっしゃる筈は無いです。今日だつて然様です。僕の宅に居て下さるから、求めて困つてらっしゃるんです。ですから、僕は先生に對して實に御氣の毒なんです。」

「さう云ふ譯でもないさ。困るも困らないも運命さ。併し、僕は如何なる場合にも奮闘する意だ。君だつて大なる負擔があるんだから、大いに奮闘したまへ。僕と君とは今後一層親くせんさやアならない。僕も君の爲に盡すから、君も僕の爲に盡して呉れたまへ。兄弟手を携へて奮闘したら、何事か爲し得たらんやだ。君、いゝかね。」

元二は勝彌が斯までに自分等を思つて居て呉れるのかと、今更ながら嬉しくてならぬ。で、聲に出して返答を爲し得ないで、態度に其を見せながら、眼は感激の涙に潤ませて居

た。

(三八)

勝彌等が寢床に入つてから重勝は歸宅した。結果が好かつたと思つて、茶の間の横の室にてお籠と話しながらの笑聲さへ聞こえた。

「好結果らしいね。」

勝彌が元二に呷くと、返辭が無いのは既う眠りに落ちて居たらしい。

「元二君は未だ、屈托だの苦痛だのと云ふ眞の味を知らないんだな。これが可いんだ。」
其内に重勝夫婦も寢に就く様な氣配が聞こえ、また暫時話聲が爲て居る様であつたが、聽て森となつた。

勝彌は今日の中に千代乃と確と相談を爲て置く意であつたが、終に其機會を見出し得なかつた。で、尙ほ何となく不安の念が胸裡を往來して、容易に寢着かれさうでない。

「御祖母さんには無論異議はあるまい。いや有るべき筈が無いんだ。喜んで承知されるに違ない。併し……併し困るのは彼兩親だ。後來必ず面倒な事が發るだらうと思ふ。それが實に可厭だ。乃公は然様と知りながら、尙ほ美都子と同棲爲なきやアならないだらうか。いや、考る迄も無いんだ。それで居て、乃公は如何あつても美都子を娶りたくてならない。美都子の事になると、乃公は判断力は鈍つて、彼を愛する情には理性も盲從して了ふんだ。無分別かも知れない、青年の血氣に誤られてるのかも知れないけれども、美都子を得さへすれば可い。兩親なんぞ如何だつて構ふものか。御祖母さんが縦し不同意であらうとも、如何でもして彼女を得なければならぬ。』

此様事を繰返し／＼考へて居るのだから、睡氣が萌すどころでなく、眼はいよ／＼みえるのみだ。

勝彌は不圖寢苦しさうな太息を聞つけた。それは茶の間の千代乃で、御祖母さんも乃公と同一で、睡れないで弱つて居られる様だと思つた。

暫時してから、また太息を聞いた時勝彌は聲を掛けた。

「御祖母さま、御安眠が出来ないんですか。」

「何だか寢苦しう御在ましてね。先生も御眠なさらない様で御在ますね。」

「さうです。眠れないで困つてるんです。何時になりませうか。」

「さうです。千代乃は臆なる有明洋燈に時計を仰いで居るらしく、暫時してから、

「もう一時過ぎで御在ますよ。」

「さうですか。睡むれないと種々な事を考へていけませんでな。」

「眞箇で御在ますね。」

暫時すると勝彌は突如跳起きた。

「御祖母さま、僕は貴方に御相談を願ひたい事があるんですよ。」

「私に。」

「さうです。今日の中に御相談を願はうと思つて居たんですが、其機會を得なかつたものですから、つい申し上げないで了ひました。」

「其様御急の事なので御在ますか。」

「急ぐと云ふ譯では無いのですが、御祖母さんから確とした事を伺はなきやア、何だか不安でしてな……實は其事を考へてるもんですから、つい眠れないで居るんです。」

「何様事か知りませんが、御遠慮なさらないで、早く仰有つて下されば能う御在ましたのにねえ。此處から伺つて済む事なら、其處から御話下すつても能う御在ますよ。何なら、其方へ伺つても能う御在ますよ。」

「いえ、僕の方から伺ひます。御祖母さまは何卒其儘で御居てを願ひます。」

勝彌は起上つて帯を締直した。

勝彌が起上がつたらしい物音に千代乃も臥床を離れると、勝彌は静かに唐紙を開けて入つて来て、

「御祖母さまが起きて下すつちや、恐縮です。」

千代乃は自分の眞盆を勝彌に進めながら、

「何様御用ですか、御遠慮なさらないで仰有つて下さいよ。」

「はう。」

勝彌は何となく云出しにくく、傍に眼を刺すと、美都子が彼方向の寝姿——美しい領尼から乳色した耳朶へ掛けて、細めた三分心の弱い光にほの白く流れて居る。

「貴方には何時も御迷惑ばかり御掛け申しまして、實に御氣の毒だと、美都子とも能く話して居ますのですよ。美都の父は彼通の意氣地なしで御在ますし、母は母で御存知の通の我儘者ですし、先生は無そ愛想を盡して居らっしゃる事だらうつて、元二とも度々話して居るので御在ますよ。實に御氣の毒なまでねえ。」

勝彌は垂頭いて聞いて居た。

「先生、私が此様事を申して御心地を悪くなすつて下すつては困りますけれども、先生はあの何で居らっしゃいますませう、他へ轉宿りたくお爲りなすつて……御心地を悪くなさらないで御聞き下さいませ……他へ轉宿る事に就いて、私に御用が御在りなさるのではありませんか知ら。」

勝彌は覺えず顔を上げた。

「美都子さんから、何か御聞きでしたか。」

「美都は何にも申しませんけれども……先生から美都に何か御話なすつた事でもありませんのうですか。」

「然様です。實は今日種々御話した事があるのです。」と、勝彌は思切つて斯う云出した。

「其について御祖母さまに御願があるのですか。」と、千代乃の顔を見た。

「何様御話で御在ますか知ら、伺はないでは御返事が出来ませんけれども……御遠慮なく御話を願はうぢやアありませんか。」と、千代乃は心持膝を進めた。

「僕の御願と申すのは、美都子さんの事です。」

「はい。」

「美都子さんを僕に下さる事は出来ませんでせうか。」と云つて、勝彌は千代乃の之に對する返辭が、自分の最後の運命を左右するもの、様に考へられて、堅座を飲みながら屹度其顔を見た。

千代乃は別に考へる様子もなく言下に、

「美都の様な不束な者でも、先生が貰つてさへ下さるなら差上げますよ。」

勝彌は千代乃に異論は無い筈と豫て思つて居たけれども、斯まで容易に承諾を得ようとは、却つて張合拔の氣味で、暫時は返辭も出なかつた。

「ですけれども、御存知の通、何一つ仕込んで無いので御在ますから……裁縫だつても充分稽古させないであります位ですから、先生が嘸ぞ御世話が御焼けなさるだらうと存じましてねえ、誠に御氣の毒で御在ますよ。」

「では、御承諾下さつたので御在ますな。」

「はい。美都の兩親へは私から話を致して、不承知は申させません意で御在ます。」

「萬一御兩親が御不承知だつたら、と、勝彌は尙ほ念を押したかつたけれども、何となく躊躇はれるのであつた。

千代乃は煙管に莖を塞めながら、彼方向に寝て居る美都子を見返り、

「美都子の爲には、私も此迄何様に心配致したか知れない位で御在ますよ。先生の事ですから、大要は御察しなすつて居らッしやるでせうが、幾度危い目に逢はうとしたか知れないので御在ますよ。それもね、私が斯うして居る中は、兩親か何人に暗されませうとも、

他人の食物にさせる様な事は致させない意で御在ますけれども……元二は未だ彼様で御在ますしね、私が鐵坊の跡でも追ふ様で御在ますと、美都が何様ならうかと存じましてね。」と、ほろりと涙を零して、「其事ばかりが氣に掛つて居たので御在ますよ。彼様意氣地の無い兩親はあり、美都はまた御存知の通の不束者で御在ますし、先生は嘸ぞ御迷惑で居らつしやいませうけれども、行末永く見捨てさい下さらなさまやア、此兒も幸福で御在ますし、私も何様にか安心します。」

「何様事があつても、見捨るなんて事はありません。其邊は御安心を願ひたいんです。」

「何卒よろしく御願申しますよ。それにあのう。」と、千代乃は躊躇ひながら、「美都を願つた上に、兄までもとは申上げ難う御在ますけれども、彼兒も御存知の通、未だ世間は知りませんし、身を立てるだけの學問は爲て居りませんし、行末が實に案じられるので御在ますよ。先生には御氣の毒ですが、彼兒の事もよろしく御願申しますよ。」

「承知致しました。併し、僕だつて未だ書生ですから、とても充分御世話なんぞ出来る筈がありませんけれども、僕の方に及ぶ限は、相扶助合つて行く意に、豫て話合つてゐるんですから、其點は御安神下さい。」

「厄介な弟をお有らなすつた御意で、何卒よろしく願ひます。」

勝彌は千代乃と話しながらも、斷えず美都子に眼を注いで居たから、彼が尙だ眠り居らずして、祖母と自分の談話に注意して居るらしい様子を、其呼吸の加減に依りて察し得たので、斯く相談が圓滿に纏つたのを知つて、美都子も自分同様何程喜んで居るか知れぬと思ふと、實に満足で満足で溜らないほどだ。

と、不圖耳に入つたのは隣室の談話だ。眼が覺めて居るのは、千代乃と自分と美都子の外にはあるまひと思つて居たのに、重勝夫婦の談話が爲るのだ。思ふに、彼等も未だ眠らなかつたのか、自分等の話聲に眼を覺したのか、何れか其一つで、多くは自分と千代乃との談話の始終を聞かれたかも知れない。と思ふと何だか不快でならぬ。

「御祖母さま、僕は引取ります。大變御邪魔を致しました。」

「いゝえ、御迷惑さまでしたね。」

勝彌が座敷に歸つて臥床に入らうとすると、平素枕に就くと直ぐに眠つて、眠つたら眼

を覺しッこの無い元二が、眼をぱっちり開いて見上げて居た。

「元二君、君聞いて居たらうね、僕と御祖母さまと談話して居た事を。」

「はい。僕は此様に喜ばしい事は無いと思つてます。」

「さうかね。僕も満足なんだ。併し……。」

勝彌は何か云足さうとしたが語を断つて、

「君、話は明日の事に爲て、もう眠ようぢやアないか。」

「さうですか。では。」

元二は尙ほ話したかつたらしいが、勝彌が云ふまゝに口を噤んだ。

(三九)

重勝は彼日止むを得ず調金の爲に我家を出たのであつたが、何處へと云ふ目的さへなかつたのだ。で、此とても相談相手にさへならぬと思ひながら、飯田町の山田に見玉権二を

訪うて見たのであつた。

見玉さんはと聞くと、在宿であると云ふのを幸ひに其居室に案内されると、権二は机に片臂を掛け、片手は懐手の、如何にも鷹揚な態度で、着服も伊勢崎の蚊緋に新しい白縮緬の帯、大分懐都合が好さうに見受けられた。

「柏木の御父さん、すうツと此方へお入り下さい……僕の所へ来て遠慮なさる事は無ですよ。その座布団を敷いて下さつて……何ですよ、何だつて其様遠慮を爲さるんですよ。何卒此處に坐つて下さい。此處に下さよ。」

権二は愛想よく重勝を迎入れて、

「どうも非常に御無沙汰して居ます。何方も御異變はありませんでせうな。」

重勝はひよこく頭を下げながら、

「はい、御蔭さまで一同びんくして居ます。君は漸次御出世の様で御羨ましく御座んすな。」と、じろく権二の扮装を見た。

「いや、相變らずの窮措大で意氣地は無いですよ。」と、哄然大笑したが、俄かに眉を顰め

「彼時切御無沙汰爲て了つたですが、鐵ちやんの病氣は如何ですか。おひく快方に向はれた事でせうな。」

「鐵坊ですか。」と、重勝は鼻を塞らせて、「君が御診察下さつた翌日、死去なつて了ひましてな。」

「あの翌日。」と、眉を蹙せて太息を吐いて、「それは残念でしたな。少しも知らんかつたで、御用にも伺はないで申譯がありません。」

「いえ如何致して……併し、可哀想でした。」

「御察しするです。御祖母さんも御母さんも嘸ぞ御力落でしたらう。鳥渡御一報下さると、何なりとも應分の御手傳を致すのでしたかな。」と不平らしい語調だ。

「御報知申さなかつたでせうか。そんな筈は無いと思ひますがな。」

「いや、御報知は受けなかつたです。御父さんに今伺つて辛と承知した位ですからな。」

「元二が御報せ申した筈だと思つて居たのですが……御報知爲ないなぞとは怪しからん話で、誠に申譯がありません。」

「いや、御父さんや御一家の方は止むを得ないので。元二君にしても年が若いんだから、迂闊忘れたと云ふ事が無いとは限らないですが、久能木君が不注意なんです。僕に云はせると、久能木君が没分曉いと思ふんです。一家の方達は悲愁やら取込やらで、其邊まで手が廻らないのは當然なんです。ですから、其邊の注意は萬事久能木が爲なきやアならぬいんです。それを僕に限つて報知を爲ないところを見ると、久能木が何か僕に嘲むところがあつて、故意に通知を爲んかつたかも知れんです。僕は御父さんや元二君を怨みはしないですが、久能木が怪からんと思ふのです。」

「彼の人もそれ程の考があつたのではありますまいよ。御通知を致さなかつたのは、何とも申譯がありません。私から改めて御詫を致しますでな、何卒水に流て下さる様にな。」

「いや御詫には及ばんですよ。併し久能木と云ふ男は失敬な奴です。」

其處にお須壽が茶を入れて持つて来た。

「須壽ちやんは初めて御目に掛るんだッけね、此方は美都子さんの御父さんだよ。」

「おや、美都子さんの。」と、お須壽は丁寧に叩頭を爲ながら、「初めて御目に掛ります。」

「御父さん、此家の娘さんです。」

「左様で。御邪魔を致します。」と、重勝も會釋を返す。

「粗茶で御在ますすけれども。」

お須壽が重勝に茶を進める傍から權二が、

「須壽ちゃん、久能木ッて男は能々僕を怨んでるんだね。」

お須壽は平氣な顔を爲ながら、

「如何していせうね。貴方何にも御怨まれなさる事はありませんでせう。」

「此方になくッたッて、先方で怨んでるんだから爲様がないさ。尤も、此家に居た時分から可厭な奴だッたッけ。おつう君子然と構へて居やがるから癪に障るんだ。彼奴の彼のおれ

は面を見ると、僕は反吐が出さうだ。」

「は、は、は、は。」と、お須壽は異な笑方をした。

重勝は元來が好人物だから、權二に相槌も打かねて苦笑を爲て居た。

「御父さん、彼奴の彼の君子然たるところが、即ち其喰せ物たる所以なんですから、大に

注意なさるが可いですよ。」と、お須壽を見返つて笑ひながら、「此人なんぞも、久能木の君子然たる所に迷込んで、危い目に逢つた一人なんですからなア。」

重勝が覺えずお須壽を見ると、顔を眞紅にした。

「迷込んだなんて虚構ですけれども、親切らしく見せて、中々不實な方よ。」

「さうでせうかな。」と、重勝は半信半疑の小首を捻る。

「御父さん、貴方も氣をお注ひなさらないと、美都子さんを棒に振つて了ひますせ。御祖母さんや元二君は疾に簡絡されて了つてるんだし、充分注意なさらないと眞に危険ですせ。」

「其様方の様には見えませんがな。」

「其處が彼奴の食せ物たる所以で、猫を被る事が實に巧いですからなア。」

重勝は眞顔でお須壽に向ひ、

「貴方に對して、何様不實な事をされたのですか。何か其の、巧い事を云つて貴方を欺して置いて。」

「其様譯ではありませんけども、」

「其様譯で無い事があるもんか。」と、權二はお須毒の語を造つて、「御父さん、須毒ちゃん
は自分の方から迷込んでた弱味があるもんだから、今になつても尙だ久能木の事を屈負し
てるんですよ。」

「あら其様事は無いは。」と、躍起となる。

「は、は、は、は、は。」と、重勝が笑ふ。

「兒玉さんは好加減な事はかし……覚えてめらッしやらよ。」

お須毒は態と怒つた様な振を爲し、突と立つて階下へ行つて了つた。

重勝は微笑しながら、

「人間も若い中の事ですな。談話が何處か活潑々地して面白い。は、は、は、は、は。」

兒玉も大口開いて笑ふのであつた。

權二は忽ち眞顔になつて、

「此處の娘なんざ如何でも可いですが、美都子さんに注意なさらないと、飛んでも無い事

になるですよ。久能木は女の心を囚へる事が巧妙だから、餘程警戒なさらないと後悔なさ
るですよ。」

「難有う。其様人とは知りませんのでな、一同信用しまつて居るのです。能うがす、歸宅
ましたら御注意の次第を一同へ。」

「一同へつて、皆さんにですか。それは不可ですな。御祖母さんと元二君とは、既に彼奴に
籠絡されて了つてお居での様だから、迂闊した事はお云ひなさらないが可いです。元二君
から彼奴に、兒玉が斯う云つたなんて事が漏れ様もんなら、彼奴がまた何様悪策を講ずる
かも知れんですから、御祖母さんと元二君、それから美都子さんと三人へは御話なさらな
いが可いでせう。」

「それも然様ですな。では、お瀧だけに話を爲まして、充分注意させる事に。」

「どうです。然様なさるが可いです。久能木がお宅に同居する事になつた目的と云ふのは、
唯美都子さんを得たい許りなんで、彼奴が君子然たる態度を取たり、俠者を粧うたりして
るのは其手段に過ぎんですからな、今の中に充分警戒なさる事を望むのです。此家の御袋

と娘なんざ久能木を怨んで、其當座は泣暮して居た位なんです。」

「さうですか。久能木先生も見掛に依らない人ですな。」と、重勝は今は権二の語を信せずには居られなくなつた。

権二は重勝の他に動かされ易い性質を知つて居るから、其様子に自分の語が充分彼を動かしたと思つたので、態と話を他に轉じて、

「御父さん、頃日は肥町の方は何様景況ですか、依然折々御出馬なさるでせうな。」
重勝は俄に悄然として頭を掻きながら、

「いやはや、不相變失敗續で、手も足も出るんぢやありませんや。その爲に家内には苦情が發りますしな、朝夕にも困るツてな譯でげしてな。今日なんぞも其紛紜から宅にも居られませんが、何處を的ツて事もなしに魔誤付いた末が、君をお訪ねした様な譯でして、いや何も骨灰でげさア。」

「さうでしたか。勝敗は運賦天賦だから詮方がないので。併し、明日にも運が向いて來れば、一攫千金の面白い事もあるんだから、何も落魄なさる事はありません。」

「いや、落魄するも爲ないも、落魄する前の事なんで、内輪は揉める、兵糧は盡きる、手も足も出なくなツちやア既う駄目ですア。」

「なアに、其様に落魄なさる事はありません、早晚に何かまた好事が向いて來ますよ。」

「早晚になんて、其様優良な事で凌がれりやアですかね。」と、重勝は権二の顔色を窺ひながら、「實は明日の兵糧にも困つてる次第でしてな……兒玉さん、貴方如何でせうかな、自然御都合が好い様な事でしたら……如何にも面目無い次第ですが、如何でせうかな。へへへへ。」

「僕に融通が出来ないかと仰有るんですか。」

「實は御都合が能きやアと思ひましてな。」

「僕にですか。」

権二の眼にも口元にも冷笑が含まれて、今までとは態度ががらりと變つた。

重勝ははッと眼を睜つた。

権二は言下に重勝の金談を却けようとして、而も既て嘲笑の色さへ其面に見はしたので

あるが、俄にまた態度を一變して優しげな微笑をさへ浮べた。と云ふのは、重勝の口を借りて、勝彌を其一家の人々から排斥させるには、快く金談に乗りて自分を信じさせて置く必要があると感じたからだ。

「僕見たいな貧生に金談と云ふんですから、一時は驚いたですね。併し、臆斗の事でないやア、如何にか工夫しても見ませうが、全體幾許御入用なのです。」

重勝は吻と息を吐いて、

「幾許と云ふ事ありませんのでな、まア五圓もあれば一時は凌げようかと思ひますので。五圓が難かしい様でしたら、なに三圓でも可いので御在ましてな。」

「五圓なんて僕には駄目ですが、三圓位なら如何にかならん事もないですな。併し、僕の懐中には、三圓の事は措いて一圓も怪しいんだから、お須壽の御袋に相談して見ようと思ふんです。お須壽だつて、自分の金を其位は持つてるかも知れないですから、僕が借る意にして聞いて見る事にしませう。」

重勝は何様筋の金であらうとも、厭ふ場合でなかつた。

「其様事に願へれば願ひたいものですな。」

「鳥渡待つて、下さい、階下に行つて相談して来るですから。」

「何卒よろしく。」

權二は梯段の上まで行つて、手を拍いてお須壽を呼んで、相談して居る様子だ。重勝は其成否如何にと耳を澄したけれども、隔が遠過ぎるので聞き取り様が無かつた。

暫時すると梯段を下りる一人の足音が聞こえ、懸て其がまた上つて來ると、何かまた相談して居る様子で、縁側に男の足音が此方へ來ると共に、梯段を下りる女の足音もした。

「御父さん、御待遠でしたらう。」と、權二は得意らしい微笑を含みながら、「お須壽を談じて辛と借る事にしたですよ。五圓は持たないと云ふ事ですから、三圓で御勘辨を願ひたいですね。」

「いや、それで充分で御在ます。お蔭で非常に好都合です。お瀧も何様に喜ぶか知れませんが、

權二は一圓の兌換券三枚を紙に包んだまゝ、重勝に渡した。

「何時を期限と云ふ約束を爲た譯ではないですが、御都合次第返して遣つて下さる様に願ひたいです。」

「兩三日内には如何にか致します意です。鳥渡一筆認めて置きます事に。」

「それには及ばないと思ふですけれども、何なら僕宛に一筆願つて置きますかな。」

重勝は紙と筆とを借りて、さつとした借用證を認めて權二に渡した。

「餘り現金過る様ですが、些と急なまやアならない事情がありますので、これで御暇致します。」

「どうですか。」

重勝が立上らうとするのを、權二は押へて、

「御父さん、久能木に注意を怠つちやア不可いですよ。」

「承知致しました。」

「僕も一兩日の内にお訪ねします。」

「御待ち申します。」

重勝は權二の下宿を辭し、歸途尙ほ二三軒奔走したので、我家に歸着いたのは夜更けてからであつた。

(四〇)

勝彌が千代乃に美都子を貰ひ受ける相談を爲て承諾を得たのは、重勝が權二から金を借り得た其夜の更けてからで、重勝夫婦も元二も聞いて居たのであつた。元二は妹の爲に喜んだが、重勝夫婦は自分等の爲に容易ならぬ大事だと驚いた。況して重勝が權二から聞いた勝彌の油斷のならぬ男だと云ふ事を、既にお瀧に話した後の事だから、夫婦は一層容易ならぬ大事だと思ふのであつた。

重勝夫婦は——別けてお瀧は、美都子に懸つて老後を左團扇で送らうと云ふ希望を懐いて居るのだから、尋常一様の婿では満足が出来ない。勝彌が東京の富豪の息子か、地方の素封家の倅でもあれば、千代乃よりも前に二ツ返辭で奉るかも知れないのだ。けれども

勝彌は一個の書生だ。小説を書いたツても其収入は知れたものだ。現に昨今の様子をみても解る。もう十圓の事は措いて、五圓の融通も利かなくなつたぢやアないか。此様男に大切な掛兒の美都子を興つて如何なるものか。是非とも此縁は打破して丁はなきやアならない。それには、第一に母——千代乃——の心を勝彌から遠去らせねばならぬ。母は剛情だから一旦約束した事を變改する譯には行かないなぞと云ふかも知れないが、如何でもして母を思返させなきやアならない。それには美都子に腹を極めさせて置くのが第一だ。勝彌は男振が可いと云ふのではなし、婦人の心を惹着ける様な御世辭が巧いと云ふのではなし、美都子が勝彌に意を傾けて居るなぞと云ふ事は、勿論あるべき筈でないのだから、母から美都子に其意を含めない中に警戒して置く方が可い。美都子が否を云へば、母が何と云はうとも、結局は愚圖／＼に了つて、自分等の意思通になるに違ひないのだから、明日は先づ第一に美都子を戒めて置かう。それから母を説破する事にしてなぞと、夫婦の間には私々ど作戦計畫が議されて居たのであつた。

其夜は明けて、お瀧が釜の下を焚付けて居ると、美都子が後れて出て来て、

「母様、遅くなつて済みません。」

「今朝は平常よりか早いなだから、今少時寝て居ても可かつたのにねえ。」

「母さまがお起きめそばしたのに、寝て居ちやア済みませんは。」

美都子が棚から摺鉢を卸して味噌を摺りに掛るのを、お瀧はあはてゝ止めて、

「お前さんは其様事をお爲でないよ。指が太くなつたり手が剛くなつたりして困るよ。もう焚付いた様だから、籠の下を見て居てお呉れ。」

お瀧は美都子の手から播粉木を奪ふ様に取りつて、

「美都子は摺鉢を押へて居た。」

「美都ちやん」と、お瀧は摺鉢の縁近く播粉木で扱落しながら、「お前さん、昨夜の話を聞いてお居でたらうね。」

「昨夜の話ですッて。」

「御祖母さまと久能木さんの談話を。お前さんの枕頭での談判だらうぢやアないか。お前さんお聞きだつたらうねえ。」

美都子は垂頭して凝然として居る。

「聞いてお居でだつたんだね。」

お瀧はじろりと美都子を見て、また播粉木を廻し初めた。

「美都ちゃん、其柄杓でね、水を二杯注れてお呉れ。」

「はい。」と、母の命の儘水を注れた。

お瀧は播粉木で徐かに摺交せながら、

「美都ちゃん、先生は何だつてね、如彼で女を嗜かす事が巧くつてね、土境場になると投出してお丁ひだつて云ふよ。人は外観に依らないもんだね。」

「其様方ぢやないは。」

「私も然様思つてたのさ。云ふ事だつて爲る事だつて彼様に眞面目な方だから、眞逆其様方ぢやないと思つてたんだよ。だけれども、父さんが聞いてお居での様だと、満更虚構でも無さうなんだよ……其お鍋を此處へ寄越してお呉れ。」

美都子が鍋を持って來ると、お瀧は其に味噌を篩しながら、

「お前さんは聞いてお居でだつたでせう。」

「何をです」

「何をツて、御祖母さまと久能木さんの昨夜の談話をさ。」

「いゝえ。」と小さい聲で答へて垂頭した。

「聞て居なかつたとお云ひなの。」と、凝乎と見て、「その談話ツて云ふのはね、久能木さんがお前さんを貰ひたいツて相談なのさ。」

美都子は黙つて居る。

「御祖母さまは久能木さんに悉皆欺されて居らッしやるもんだから、とう／＼承知してお了ひなすツたんだよ。」

美都子は依然垂頭したまゝ、黙つて居る。お瀧は美都子の様子に何か見えたら、其次第で説法を考へる意で居たのに、些も變が見出されない。驚くか羞しがるか二つに一つ、何れか態度に見はれるかと思つたのに其が無いのは、未だ其様事に感じるほど心がませて居ないのかとも思はれ、既に祖母から説かれて、久能木の妻となるべく覺悟して居るかとも思は

れる。

「美都ちゃん、お前さんの一生の大事なんだから、母さんだつて此様に心配するんだよ。お前さんだつても、自分の一生の浮沈の瀬戸際だと云ふ事を御考へてね、迂濶して居てお呉れだと困るよ。先生が真逆に女食——そんな卑劣い人だとは、私だつて思やアしないけれども、……だけどもね、假にも其様噂を立てられてる方なんだから、迂濶爲てえて後悔する様な事にでもなつた日には、第一お前さんが可哀想だし、御祖母さまたつて母さんだつて何様に情ないか知れないんだよ。だからね、能く考へてお呉れでなさやア困るよ。美都ちゃん、お前さんは何だらうね、御祖母さまが然様お爲つてお云ひなすつたら、然様する氣で御居でなんだらうね。」

美都子は勝彌が母の云ふ様な男でない事を堅く信じて居るから、母の云ふ事が腑に落ちぬばかりでなく、故意に破壊に掛つて居るんだとより思へぬのである。で、母の云ふまゝに聞過して相手にならなければ可いと、唯々垂頭いたまゝ黙して居るのだ。其内に飯が吹く、火の加減をする、廳で火を汗の方へ移す。

「美都ちゃん、お前さん何だよ、母さんはお前さんが可愛いから云ふんだよ。何卒ね、自分の一生の大事だと思つて、御祖母さま任せにばかり爲ない様に頼むよ。お解りだつたらうね。」

「えへ。」と、首肯いた。

「母さんがお頼みなんだからね。」

「えへ。」と、また首肯いた。

母が何も云はなくなつたので、美都子は草箒と塵芥取を手にして、門内の掃除へと行くのであつた。

(四一)

勝彌は昨夜深更に千代乃と相談を爲た結果、いよく美都子を妻に貰ふ事になつたので、今朝は昨朝に比べて何となく愉快だ。其事を早く美都子に話して喜ばせたいと思ふけれど

も其機会を見出し得ない内に朝飯の時刻となり、一同茶の間の食卓を圍む事になつて、お瀧と美都子とは給仕やら何やらで、何時でも後に残るのが例で、今朝も亦其通で、勝彌が食事を済ます迄お瀧は草所から出て来なかつた。

平素、温和しい眼を爲て傍眼もしないで食事を爲る重勝が、今朝に限つて一寸々々意味ありさうな眼を爲て勝彌を見る。唯見るばかりではなく、澄ぬ顔をして居る。

今朝は如何かされたのか知ら。乃公に對して何か不平でもありさうな風だが……さては美都子の一條に異議があるんだな。乃公の妻に呉れともないんだな。昨夜御祖母さんと乃公との直談が済むと、夫婦で何かこそ／＼話して居る様であつたが、其夫婦の話の結果が今朝の父さんの彼眼顔となつて見れたんだな。其は豫て期してた事だ。乃公の方には第一當人の承諾を得て居る。次に御祖母さんが彼等父母には異論を唱へさせないと受合つて居られる、第三には元二が大恐悦で双手を舉げて賛成して居る。今更父母が異議を唱へようとも、最後の勝利が乃公の方に在る事は云ふ迄も無いから、何も心配するがものは無いのだ。去來となつたら長夫も何か云出すかも知れないが、彼男なんざ敵として恐るゝに足ら

ず、味方として頼むに足らないんだから、彼男は如何でも可い。併し……併し、美都子の父母であつて見れば、出来るものならば快く承諾を得て、後永く紛紜の根を斷つて置きたい。それでないと、其爲に美都子が困る場合が幾度か起るであらう。其が如何にも氣の毒だ。何卒父母の心が解けて、快く承諾を得て置きたいものだ。それには如何したら可いであらうか。やはり御祖母さんの力を借りるの他に手段は無さうだ。

勝彌は食事を済ましてから、机の前で此様事を考へて居たが、また斯うも思つた。今日は御祖母さんから父母を初め他の人々へも美都子の事が持出されて、一同の承諾を求められるに違ない。其會議の結果、乃公と美都子の運命が定まるんだ。御祖母さんと元二と美都子とは乃公の味方だから、彼父母に假に長夫を加へるとしても、敵味方半々になる。美都子は自分の事であるから口を出すまい、して見ると三と二になる。乃公に取つては大いに不利益な會議と云はなければならぬ。はて如何したものであらうか……いや心配する事は無い。御祖母さんの權威は能く父母を壓するに足り、元二が長夫と取組んだとして、大いに譲つたところで五分／＼の勝負だ。其上美都子が動かなければ、勝敗の数は戦はずし

て既に決して居る様なものだ。乃公が心配するのは眞に杞憂に過ぎない。如何考へても美都子は乃公に來るに極つて居る。些も心配するがものはない。

併し、乃公が居たら相談が爲難いかも知れない。乃公は外して居る方が可い。林でも訪ねて見ようか。久し振に紫瘦を訪ねて見ても可い。兎に角今日は外して居る方が双方の便利だ。勝彌は散歩に行くと言置いて、何處ともなく出て行つた。

勝彌が出た後で、お瀧も美都子も食事を済まし、美都子のみ臺所で後仕舞を爲て居ると、茶の間では美都子婚嫁の問題に就いて會議が開かれた。

千代乃と重勝夫婦は云迄もない、長夫も今日は出勤時間が後れたと云ふのを口實にして銀行を休んだから、自然會議の席に列なる事になり、元二は自分の一大事でもあるかの様に、兩手を膝にしてちんと構へて居た。

千代乃は勝彌が美都子を妻にと望み、自分も其を許容した事を話して、

「……お前さん達も否をお云ひではあるまいと思ふんだよ。美都子も此で身が堅るんだしね、私も漸と一安心しました、元二、お前も不承知をお云ひではあるまいね。」

「無論ですとも。美都子の爲には實に幸福だと思ふんです。」と、元二は言下に賛成した。

重勝もお瀧も下を向いて、可いとも否いとも云はない。長夫は千代乃と元二の顔を忌々しさうに見較べて居たが、ふんと鼻の頭で笑つて置いて、

「私は反對だ。元二は美都子が幸福だとか云つて居るけれども、何が幸福なんだか私には解らないね。元二、幸福ツてな、久能木見たいな人の事を云ふのかい。彼様人の妻になるのが何が幸福なんだらう。貧乏書生に小し毛が生えてる位で、財産があるんちやアなし、地位があるんちやアなし、第一妻を容れる家からして無い始末なんちやアないか。幸福が聞いて呆れらア。あはは、」

元二は躍起となつた。

「財産がありやア幸福だツて。ふん。地位や財産なんてものが何だ。叔父さんなんざア財産や地位で人の價値を極る意かも知れないが、僕なんぞの所思は全然反對なんだ。人の尊いのは人格に在るんだよ。此様事を云つたツて、叔父さんなんぞにや解らないだらう。久能木先生の價値が、叔父さんなんぞに解つて溜るものか。あはは、」

「生意氣な事を云つてやアがるせ。久能本が人格が高い。乃公には解るまいッて。は、は、は、母さんを巧く瞞しやアがッて、美都子を自分の物に爲ようッて男に、人格が何の斯のッて、天から問題になりやしないや。親切らしく見せ掛けたのは奴の手なんだ。美都子を得ようッて策なんだ。第一母さんが誤魔化されるから不可いんだ。」

元二は一入躍起となつた。

「先生が御祖母様を欺したッて、美都子を得よう爲に親切を粧つてるんだッて。そんな事があるもんか。叔父さんなんざ自分の心に較べるから、其様失敬な事を云ふんだらう。先生が最初ッから美都子を欲いッてお云ひなすつたんぢやアない、僕か貰つて下さいッて——先生が未だ山田に下宿してお居でなすつた時に、僕が美都子を貰つて下さいて頼んだ。」

お瀧は吃驚の眼を睜つた。

「元二、お前本當に此方からお頼みなのかい。」

「どうです。」

「お前の一存でかい。」

「御祖母さまが左様お云ひなすつたから、僕から先生へ御話爲たんだ。」

「母さま。」お瀧は千代乃に膝を向けながら、「元二が云つてる様な事を、母さまが本統

に仰有つたんですか。」

重勝も長夫も齊しく千代乃へ膝を向けるのであつた。

「美都子の行末の事を考へると、心配でならないものだから、久能木さんならと思つて、私

が元二へ話を爲た事がありましたよ。」

千代乃が斯う答へると、重勝夫婦は顔を見合せ、長夫は不平で堪らない顔を爲た。

「一應は、私達へ御相談下すつたッて能さうなものだと思ひますね。」お瀧は斯う云

つて太息を吐いて、「いくら親甲斐がないと申したッて、親は親ですからねえ。」

「さうなんだ。姉さんがお云ひの通なんだ。私だッて美都子の叔父だ。母さん一人で極め

ないだッて、一應は相談して下すつたッて可い筈なんだ。私は姉さんのお云ひの方が正當

だと思ふ。」

長夫に續いて重勝も何か云はうとしたが、只口をもぐぐさせたりけて云ひ得なかつた。

千代乃は煙管に莖を塞めながら、沈着き拂つて、

「美都子の事に就いては、お前達から種々な事を云はれる譯はありませんよ。だけれども、去來つて時には、相談を爲る意で居たから、今日だつて斯くして話を爲て居るぢやアないかね。尤も、最初元二から先生にお話をお爲の時には、是非貰つて下さい、是非上げませうツて云つた譯ではありませんよ。先生に美都子を貰つて下さる氣があるか無いかを知りたいと思つて、元二に話を爲て貰つただけなんだよ。」

「ぢやア、まだ何方にでもなる譯なんですわね。」と、お澁は千代乃の顔を見た。

「いゝえ、既う然様は行かないんだよ。昨夜先生と御約束を爲て了つたんだから、今更變改する譯には行かないんだよ。重勝、お前も然様思つて、下さいよ。」

三人とも暫時は何とも云はなかつた。

「ぢやア、何なんだ、今私達に相談してるんぢやアない、唯話を爲るツて云ふだけなん

だ。母さんのお云ひなさる通りだ。」と、長夫は躍起となつた。

「もう極めてお了ひなすつたんですね。」と、お澁も不快な顔を爲ながら下を向いた。

「母さんは久能木の何處を好いと思やア、美都子を遣る氣になつたんです。彼奴が何處が偉いんだ。」

「没分曉い奴に解るもんか。」と、元二は長夫を尻目に掛けた。

「お前なぞに何が分かる。」

「僕には分つてるんだ。没分曉漢には、何を見たと同一にしきやア見えないんだ。話にもならない事に、無駄な口を利くのは眞平だ。」と、元二は昂然として空嘯いた。

「失敬な事を云ふな。貴様見たいに、甘言に慰せられて妹を賣る様な奴とは、」

「何だ、妹を賣る。」と、元二はじりじりと詰寄りながら、「妹を賣るとは何だ。誰を指して其様無禮な事を云つたんだ。さア誰に向つて其様事を。」

「元二、喧嘩してお呉れぢや困るよ。叔父さんだつて美都子の事を思過をお爲だから、今見たいな事をお云ひなんだからね、氣に掛けないでお呉れよ。」

千代乃が和めたけれども、元二は鎮らさず、

「いえ、僕は承知しない、承知が出来ない。妹を賣るとは何だ。其譯を云はないか。早く云はないか。叔父だからって失敬極る……早く其譯を云はないか。早く云はないか。」

元二は膝を突掛く迫るのだ。

「元二、黙つて居な。」

重勝が珍らしくも叱る様な語調で云ふと、元二は臆面を爲ながら、

「父さんなぞが、何にも知らない辯に。」

「元二、何を云ひだ。父さんに其様失禮な事を云ふ人がありますか。お黙りなさい。」

お瀧が叱ると、元二は母へも辭を返さうと意氣込むのを千代乃が制止して、

「お前達が其様に争つてお呉れたと、相談が出来ないぢやアないかね。元二、御祖母さんが御頼だから、お前我慢を爲てお呉れでね、もう何にも云つてお呉れでない。御祖母さんが御頼みだからね、可いかい。」

元二はぶつ／＼云ひながら口を噤んだ。

「母さま、久能木さんには、外に好もしからぬ悪評がありますのですよ。」

お瀧が重勝と顔を見合せながら斯う云ふと、千代乃は眉を擡めて、

「好ましくない噂して、何様事なのかね。」

お瀧はまた重勝に顔を見合せて躊躇つて居たが、

「何様事ツて、鳥渡久能木さんに有りさうも無さうな事なんですよ。」

「何様事ですか。」

「眞箇にありさうに見えないのに、あるツて云ふんですから、人ツてもものは實に分らないものですなねえ。」

「先生に何様事があるツてお云ひなのかい。」

「何人か、中傷しようと思つて、何か云つたらう。」と、元二は冷笑つた。

「元二、お前の様な事はかきは云へねえよ。」と、重勝は眉を皺せた。

「ぢやア、先生に何様事があるツて云ふんです。」

「女を欺す事が巧手で、妻にする様な事を云つてぢやア、後では何時でも打捨つてお了ひ

だつて云ふ事だよ。」

「其様事があるもんか。先生が女を欺かすのが巧手だつて、好加減な事を云つてらア。母さんは何人から其様事を聞いたんだよ。」

「何人からつて、父さんがお聞きなすつたのさ。」

「父さんが聞いてお居でだつて。」と、元二は冷笑を浮めながら、「父さん、何人が何様好加減な事を云つたんです。」

「好加減な事か何か乃公は知らないけれども、其通聞いて來たに違ひないんだ。」

「だから、何人から聞いて來たんですかッて聞いてるんですよ。」

「山田の娘なんぞも然様だつて云ふよ。今ちやア久能木さんを何様に怨んでるか知れねえッて事だ。」

「山田の娘。」と、元二は頭を傾げたが、「うん、彼の飯田町の下宿屋の娘の事なんだな。は、は、は、。父さんは兒玉さんに欺されて來たんだ。何だと思つたら、兒玉が云つた事か。彼の人の云つた事なんぞで先生を疑ふなんて、父さんも母さんも餘り輕卒過らア。兒玉さ

んが先生を中傷しようと思つて云つた事なんか、御祖母さま氣に掛けなくつても可いんですよ。兒玉ッて人は女見たいだな、本統に可厭になつたよ。」

「お前の云ふ様にはかしは云へないよ。」と、お瀧は千代乃に對ひ、「よしんば噂にしたつても、其様事を云はれてる人に、美都子を遣るのは可厭ぢやありませんかねえ。母さまも能う考へて下さいよ。」

「本當に能く考へて貰ひたいや。」と、長夫が口を挿ひ。

千代乃は暫時考へて居たが、

「お瀧、お前や長夫が考へて見る様になつてお云ひだけれどもね、私だつても充分考へた上で、久能木先生ならばと思つたから、此方からも其事を元二に御話を爲せたのだし、彼方からも是非と云ふ事だから、既極めて了つたんだよ。此様事を云ふと、私が餘り我儘過る様で、お前さん達は心持を悪くお爲かも知れないけれどもね、美都子の事だけは私の自由に委せて置いてお呉れ。私だつても可愛い孫の一生の大事なんだから、何で好加減な事を爲るものかね。何卒安心して居てお呉れ。」

お瀧は黙つて居たけれども、長夫は直ぐに辭を返した。

「母さん見たいな事を爲れば、だれたって心持を悪くするさ。餘り専斷過ぎるんだもの。母さんは久能木の何處を見込んでりやア、一同に相談もしないで極て了つたんです。姉さんだつて兄さんだつて、好ん持の爲ないのは當然だ。私だつて何さ、叔父甲斐が無か知らないけれども兎に角叔父だ。而も一緒に居るんぢやアないか。美都子を今度斯々したいからつて、一言位相談があつたつて可い筈なんだ。兄さんや姉さんには別して相談があるべき筈ぢやアないか。私は何てつたつても不服ですから、其意で居て下さい。」

「では、お前さんは何處までも不承知だと云ひなんだね。」

「さうですとも。」

「叔父さんなんぞが不服だつて構ふものか。美都子の一生の大事なんだ、詰らない事に拘はつちやア居られないさ。」と、元二はまた悪れ口を利きながら母に對ひ、「母さん、能く考へて御覧よ。僕が覺えてから宅へ出入りした人で、久能木先生位男らしくて親切な人があつたかい。來る奴も〜詐偽師見たいな奴ばかりで、頼にでもならうつて人間が一人でも來

た事があるかい。美都子を養女に世話するの、嫁に世話するのつて云つた奴が、幾人あつたか知れない位だけれども、みんな何ぢやアないか、其を種にして金を惹出したいとか、詐欺を爲しようつて奴ばかりだつたぢやアないか。久能木先生見たいな人が、僕の宅に同居して下すつたのは實に不思議な位なんだよ。此方から頼んだつて否だつて云はれ、ば其迄なんだのに、先生も是非貰ひたいて云つて下さるんだから、僕は實に仕合だと思つてるんだよ。御祖母さん、誰が何てつたつて構はないから、先生に遣つてお了ひなさいよ。母さん父さん、美都子の前送の事をお思ひなさるなら遣つてお了ひなさい。久能木先生なら確なものだ。僕は大き成だ。」

お瀧も重勝も黙つて居た。長夫は何か云はうとしたが、何と思つたのか云ひ掛けた口を噤んで、千代乃と元二の顔を見比べながら冷笑つた。

臺所に居た美都子は、茶の間に自分の事に就いて一同の相談が始つたので、疾に後仕舞は濟んだけれども、其席に入るのもさまりが悪く、手持無沙汰に佇立みながら、相談の様子を偷聴して居た。

で、母や叔父が久能木を非難する毎に胸を踊らしながらも、深く祖母の氣質を信じて居るから、自分等の希望通に成るものと頼を懸けて、相談の果るのを待つて居ると、長夫が突と出て来て、睨む様に凝乎と顔を見たので、美都子は覺えず垂頭いた。

「美都ちゃん、お前は久能木の妻に成る意なのかい。」

長夫が問うたのを、美都子は顔を射して聞かない風をした。

「美都ちゃん、何故黙つてるんだ。」と、長夫は美都子の顔を差覗きながら、「お前は好んで久能木の妻になる意なのかい。其様事は無いだらう。それとも成る氣かい。え如何なんだよ。叔父さんへはッきり云つて呉れちやア如何だい。今茶の間で、其相談が始まつてるとこなんだよ。お前に其様氣が無けりやア——無論ある筈は無いに極つてるんだから、確と云つて貰はうちやアないか。さうすりやア、美都子も可厭だと云つてるからッて、叔父さんが打破して了はうてんだ。え如何だい。お前は如何思つてお居でだい。叔父さんの前で遠慮する事は無いよ。可厭なら可厭ッてはッきり云はなくちやア不可い。え、如何だい。お前は可厭なんだらう。ねえ然様だらう。可厭に極つてらア。可厭だと云ふのが當然なんだから

なア。は、は、は、は、。美都ちゃん、叔父さんが打破する遣るから安心してるが可いよ。」

長夫が茶の間へ行かうとしたので、美都子は驚いて覺えず呼止めた。

「叔父さん、私何ですは、私御祖母さまの仰有る通になつてよ。」

「えッ、何だッて。御祖母さまの云ふ通になるッて。」と、眼を光らせながら、「御祖母さんは久能木に欺されて了ッてるんだから、お前を彼男に遣らうッてんだせ。彼様男の妻になつた日にや、一生税の上リッこが無くッて、美都ちゃんが可愛相だから、お前の父さんだの母さんだのが心配してるんだよ。叔父さんだッて、お前をを彼男の妻に爲たかアないんだ。美都ちゃん、お前考へて見るが可いせ。叔父さんは随分お前を可愛がッてた意なんだせ。随分種々な物を買つて來ちやア、お前に遣つてたんだせ。彼様久能木見たいな男に遣る意なら、何だッて彼様に種々な物を買つて來て遣るものか。彼様に可愛がりなんか爲やアしないんだ。お前は何かい、御祖母さんの云ふ事さへ聞けば、父さんだの母さんだの叔父さんだの、云ふ事は聞かなくッても可いッて云ふのかい。おい、美都ちゃん、お前は其様氣で、久能木の妻にならうてんだね。」

美都子は垂頭いたまへて返辭を爲ない。

「美都ちゃん、叔父さんが此様に云つても、久能木の妻にならうてんだね。」

「私御祖母さまの仰有る通に成る事に極めてるんですもの。」と、垂頭いたまへ、聞こえないほどの低聲で云つた。

「ちやア何かい、御祖母さんが久能木に遣らないて云へば、お前も嫁く氣は無いんだね。」美都子は何とも返辭をしない。

「確かに御祖母さん次第だね。」

「ですけども……。」と、ばかりで口を噤んだ。

「ですけども何だッて……ですけども何だと云ふんだ。」

長夫が迫つても美都子は終に何にも云はなかつた。

「叔父さんが今一度御祖母さんに然様云つて、是非止させる事に爲なさやアならない。

美都ちゃん、御祖母さんさへ遣らない氣なら、お前も嫁く氣ぢやないんだね。よし、今一度御祖母さんに云つて遣らなくッちやア。」

長夫は茶の間へ行つた。美都子は祖母の心が動かないと信じながらも氣掛りてならないのだ。

長夫が茶の間に戻つた時は、千代乃が顔として動かない氣勢に壓されて、重勝もお流も終に屈服して了つて居た。

「元二や、美都子が臺所にお居でだらうから呼んでお呉れ。」

元二が美都子と呼んで來ると、千代乃は我傍近く坐つた美都子の俯目になつた横顔を、慈愛の溢れた眼に見据ゑながら、

「美都ちゃんや、お前に話して置きたい事があるんだよ。此事はね、私は素より父さんとも母さんとも能く相談して極めた事なんだから、お前も其意で御聞きなさいよ。」と、語を斷つて、重勝夫婦の様子を見ながら、「美都ちゃん、久能木先生の御希望でね、お前を先生の奥さんに遣る事に爲たから、其意でお居ですよ。可いかい。」

美都子は垂頭いたた顔を眞紅にして、唯僅かに頭を下げたのみだ。

長夫は怒氣を含んだ聲で、

「姉さんや兄さんも承知して丁つたんですか。僕は何處迄も不同意だ。」

「叔父さんが一人反対したって……反対するなら勝手にするが可いや。ふん。」と、元二が冷笑ふ。

長夫はくわつとし元二に食つて掛らうとした時、お滝は美都子の方へ膝を向けながら、「美都ちゃんや、お前が氣がお進みでないものを、無理に然様お爲とは母さんは云ひはしないんだよ。だからね、いやなら否、嫁くなら嫁くつて判然云つてお呉れが可いんだよ。」

「さうだとも、一生の大事だからなア。」と、重勝も語を添へた。

「美都子に異論があるものか。ねえ然様だらう。」と、元二は美都子の顔を差覗いた。

「誰が何てツたツて私は大反対だ。美都ちゃん、能く考へなさやア不可いせ。」

「美都子や、お前に異論はあるまいと思ひけれごもね、其とも……。」と、稍ためらひながら、「外に考が御有りなら遠慮しないでお云ひが可いよ。」

「外に考なんぞがあるもんか。ねえ然様だらう。」と、元二はまた美都子の顔を差覗いた。

「私あのう。」と、稍云淀むらしい語調で、「御祖母さまの仰有る通になりますは。」

重勝とお滝とは失望の太息を吐く。長夫は佛として美都子を睨み据ゑた。

「御祖母さまの意見通だツてえから、事は既に決したんだ。御祖母さま、僕は實に愉快だ。美都ちゃん、お前其語を翻へす様な事は無いだらうな。」

「えへ。」と、確と首肯いて見せた。

「愈よ決したんだ。何人が反対したツて屁でも無いや。ははは。詰り美都ちゃんの大勝利なんだ。」

「兄さん、そんな事を云つちやア可厭。」と、「入顔を絡めた。

「父さんも母さんも、聞いてお居での通だから、其意で居て下さいよ。先生には今夜にも御返辭を致す事にして……直ぐに式を擧げる事になるか、それとも別に家をお持ちの上の事になるか、そんな事も能く相談しなさいやアならないし……美都ちゃん、臺所に用が残つてゐるなら濟してお居で可いよ。」

美都子は残つた用があるのでないが、臺所へ立つて行つた。

暫時は何人も何もないので、茶の間は森として居た。

(四二)

勝彌は赤城下に林國雄を訪ねて、いよいよ美都子を妻に貰ひ受ける事にした始終を話した。林は無論異議は唱へなかつたけれども、美都子の父母と勝彌との折合面白い事情がある云ふからには、後來不斷の紛紜の爲に、美都子が苦しむ様な事がありはせぬか。それが美都子さんの苦痛であると共に、君に取つても堪へ難い苦痛となりはせぬか。君と美都子さんの結婚は僕も双手を舉げて賛成するけれども、其點に就いては君が三思せん事を望まざるを得ないんだ。君能う考へて見たまへ。切角結婚しながら、其様事から破鏡の歎を見る様な事がある様だと、如何にも残念ぢやアないかね。僕は賛成すると共に危ぶまない譯に行かないから忠告するんだよ。と、誠心を面に見せながら諫めるのであつた。勝彌も其點に就いては危ぶまないでもないけれども、如何なる障礙があらうとも、美都子と同棲しようとの決心を動すには足りないのだ。美都子の父母だつても、自分からの仕向

次第では——一朝風雲に乗ずる機会さへ来れば、如何にでも爲し得もするし、爲し得もせらるゝ人達だ。美都子に苦痛をさせるも、破鏡の歎を見る様な場合を追出るのも、乃公の努力次第では絶対に避け得られぬものもあるまひ。乃公は自分の努力が、自分の如何なる艱難をも救ひ得るものと信じてる。美都子にしても、彼の父母にしても、乃公が努力の前には、幸福な人々として相親む安樂境に住せしむ事が出来ない事は無い。林の杞憂も道理ではあるけれども、乃公は乃公の信する力を頼んで、初一念を達して見せるのだ。

で、林には其友情厚き忠告を謝し、而も自分の決心は斯うくであると話して、其日は別を告げて柏木へ歸つた。

自分の留守中に、柏木の人々の間に相談會が開かれたものと信じて居たので、其結果が如何であつたか。無論自分の希望通りに運んで居ようとは信するけれども、兎に角確めて置きたくてならぬ。元二が居れば直ぐに問ねて見るけれども、何處へ行つたか、行先を告げずに出て未だ歸らぬと云ふ。美都子にと思ふけれども、問ふべき機會が無い。其中に夕飯の膳に向ふ事になつたので、箸を擧げながら人々の様子に注意して居ると、何時もとは何とな

く違つて居て、能く話を爲るお瀧が不思議にも黙々で居る、重勝が時々儼々様にして自分を見る。長夫はぶつとして居て、給仕を爲て居る美都子に何とはなしに口小言を云ふ。これも此までに見られぬ現象だと、勝彌は一入注意を怠らずに居た。唯平生に異らぬのは千代乃で、泰然として晩酌の猪口に親んで居るので、これのみが勝彌には一方ならぬ頼で、自分の希望は既に全然達せられたものと思はれるのであつた。

勝彌が箸を指て座敷の机の前に寛坐した時、格子戸の開く音が爲た。

「元二君、歸つたのかい。」

勝彌が聲を掛けた。

「いや僕だ。」

紛れもない権二の聲だ。

「小川君も一緒だ。久能木君入つても可いかね。」

「どうぞ。」

「小川君入らないか。失敬。」

権二が前に立ち、水鏡が後に尾いて入つて来た。

「久能木君、大層御無沙汰したツけが、相變らず元氣らしいですな。」

「元氣でも無いがね。」と、微笑した。

「先生、御無沙汰しました。」

水鏡も権二と駢んで座に着いた。

「能く来たね。久瀧紫瘦君に逢はないが、相變らず勉強してるんだらうね。」

「いえ、頃は感興が起らないで駄目だツて、滅多に筆も持たれない様です。」

「さうかねえ。」

「奥さんが相變らずですしな、彼では筆を執れないのが當然ですよ。」

「さうかねえ。」と、勝彌は首肯した。

「元二君は留守かね。」

「散歩に出掛けたさうだ。」

其處に美都子が火を點けた洋燈を持って入つて来た。矢継風の品の好い浴衣を着て居る

容姿が、清々しく美しくかつた。

権二は美しいと思ふにつけて、不快の念に胸を壓へられる様だ。水鏡は唯見惚れて居た。

「入来ッしやいませ。」

美都子が丁寧に叩頭を爲て退かうとするのを権二は呼止めて、

「美都子さん、御祖母さんは御在宅でせうな。」

「はい。」

「兒玉が後で御目に掛りたいと申してたッて、御話爲さいて下さい。」

「はい。」と、美都子は退いた。

権二は疑乎と勝彌の顔を見て居たが、意味ありげな笑を含むと共に小聲になり、

「久能木君、君大概で早く定て了ッちやア如何かね。」

勝彌は覺えず眉を擧せて、

「定て了へッて、何をかね。」

「美都子さんの事を。」と、にやりと笑む。

「美都子の事、」

「貰ふなら貰うで、もう定めて好い時分ちやアないかね。既に結婚が済んでる人なら何も

云ふところは無いが、萬一まだ其處まで運んで居ない様なら、早く運ばせた方が好くは無

いかと思ふんだよ。」

「宅の先生も然様云つてお居でしした。蒼川君も定るものなら早く定めるが可い、頭日に

出掛けて行つて、大に勸告しなきやアならないと云つてお居でしした。僕なぞに口を出す資

格はありませんけれども、然様爲すつた方が能くは無いかッて、實は途中で兒玉君と話し

て来た位なんです。先生、さうなすつた方が宜しくはありませんか。」

勝彌は微笑を含んだばかりで何とも云はない。

「君、既う約束が成立つてるのかね。」

「いや、さうでもないよ。」

「けれども、君に其意はあるんだらう。」

「それはある。」

「あるなら定めて了ふが可いちやアないかね。此様事を云ふと君を初心に見過ぎて失敬かも知れないが、君から切出し難きやア、僕が代理を務めようちやアないかね。」

「難有う。」

「君眞面目に聞いて呉れなきやア不可よ。」

「眞面目に聞いてるとも。」

「ちやア、僕に委せて呉れちやア如何かね。」

「さア。」と、考へて居る様に見えた。

「及ばすながら、大いに盡力する意だよ。どうだね、僕に委せて呉れちやア。」

「さア。」と、考へる風を爲て居た。

「久能木君、僕は君が其様に考へる筈は無いと思ふんだ。君には疾に其邊の考案は定まつてる筈ちやアないかね。今更躊躇する事は無いだらう。僕に委せてまへ。及ばすながら大いに盡力して、君の希望に副ふ様にしたと思つてるんだよ。君、委せて呉れたッて可いだらう。」

勝彌は始めて首肯いた。

「君が其様に云つて呉れるんだから、お委せても可いけれども、」

「可いけれどもなんて、曖昧な事を云はないで、全然貴様に委せると云つて呉れるが可い

ちやアないか。」

「ちやア委せてもいゝ。」と、微笑を合む。

「え、委せて呉れるッて。そいつは難有い。今日直ぐに御祖母さんに談じて、必ず承諾を得んきやアおらない。君、御祖母さんは居るだらうね。」

「御居での様だ。」

「そいつは妙だ。」

権二は得意らしい笑を含んで水鏡を見返つた。と云ふのは、此談判は無論不結果に了るものと信じて居るからだ。勝彌に身をあかせ得る事と信じて居るからだ。千代乃は曾て自分に対つて明言した事があつた、洋行して來た學士か博士でなければ美都子の夫には爲ないこと云つて、自分の希望を却けた事があつた。其語に對しても、勝彌如き男を美都子の婿に

は出来ない筈だ。況て自分が其事を千代乃へ云出す以上は、乃公へ對する義理としても、久能木如き人には美都子は嫁られぬと云ふに極つて居る、それには、自分が暗に重勝に吹込んで置いた久能木の女喰の一件が、既にお滝の耳にも入つて居ようし、假に千代乃が久能木の縁談を承知するとしても、重勝夫婦が反對するに相違ないのだ。斯う思つて居るから、能と談判の衝に當つて、此縁談を打破してはうと云ふ意なのだ。

勝彌は權二如きが何を爲得るものかと多寡を括つて居るのである。會て權二が美都子を得ようとした時、千代乃が其請を謝絶つた仔細も聞得て居る。權二は其時の千代乃の言質を押へて、千代乃を苦しめようとするのであらうとも察して居る。けれども、千代乃が其位の事で、權二に苦しめられる様な女でない事を信じて居るから、權二め何を爲得るものか。爲るなら勝手に爲て見るが可い。後で物笑にならなければ僥倖だ位に思つて居るから、權二の云ふまゝに委せて、其に依つて今日自分の留守中に開かれた筈の相談會の結果を知り得る便としたのだ。兒玉も御苦勞な事だと心私に笑つて居るのであつた。

湯でも沸いて居なかつたのか、今やうやく茶を運んで來た美都子が、三人に茶を侷めて

退かうとするのを權二は呼止め、

「美都子さん、御祖母さんに御話下すつたですか。」

「はい、申して置きました。」

「では、直ぐに其方へ伺ひますが可いでせうな。」

「能う御在んすでせうよ。」

「久能木君、では御話を爲て來るよ。水鏡君、待つて、呉れたまへ。」

權二は美都子の後から茶の間へ入つて行つた。

水鏡は權二が茶の間へ入つて行つたのを見て、冷笑を含みながら低聲になり、

「彼男も飛んだ苦勞性ですね。は、は、は。」

勝彌は苦笑を爲たのみだ。

水鏡は平素の音聲に返つて、

「先生、宅の奥さんは依然毎日の様に伺はれるですか。」

「紫瘦君の妻君かね。」

「はう。」

「絶えて来られないが、頃は如何して居られるかね。」

「さうですか。見えないですか。」と、不思議だと云はぬばかり眉を寄せて、「でも、柏木君とは断えず會合して居られる様ですがなア。」

「元二君と都根子さんがかね。」と、勝彌は吃驚いた顔を爲た。

「さうです。元二君とは何處かで會合して居られる様に思はれるです。」

「それは事實かね。」

「事實だらうと思ふんです。」

「だらうって。」

「えへ。」と、氣味の悪い笑を浮べて、「半は想像ですけれども、多くは然様だらうと思ふんです。」

「想像で其様事を云ふのは驚くね。併し、君が何處かで見たとか、または他の人が、」

「いえ、然様ではないんですが、奥さんが能く柏木君の噂をされるんです。而も其都度、」

會合された時の事らしい新事實を聞くんですからなア。先生の事なんぞも……先生の事はかりではないんです、御宅の方々の御様子なんぞ迄、その日々の新事實を知つて居るんですからなア。」

「君の話には附加は無いたらうね。」

「無論です。で、僕も今日當家に伺ふまでは、奥さんが一寸／＼當家を訪ねられるものと思つて居たんですが、先生の御話では、奥さんは絶えて來訪が無いと云ふ事ですから、それでは柏木君と何處かで會合して居られるんだなと思つたんです。先生、奥さんは無性に柏木君が好きなんですせ。宅では毎日柏木君の噂で持切です。柏木君でなきやア夜も日も明けないってんですな。は、は。」

「今少し小さな聲で話して呉れたまへ。」と、勝彌は茶の間に聞こえてはと氣をかねながら、自分も低聲になり、「僕は如何も疑しいと思ふね。都根子さんは毎日宅を留守にされるか知れないが、元二君は大概毎日宅に在るんだからねえ。尤も今日は居ない。それもつい先程から、しい。」

「さうですか。ちやア、僕の想像が外れたか知ら。」と、小首を傾げた。

「今日は如何だツたかね、都根子さんは宅に居られたかね。」

「無論留守なんで。」

「どうかねえ。」

勝彌は元二に其様事があらうとは思はないけれども、都根子に操られて何様な事を爲て居るも知れぬ。萬一水鏡が云ふ様な事があつたら一大事だ。唯會合するばかりでさへ思ひべき事であるのに……緊しく注意しないと救ふべからざる大事に到らうも知れぬ。多くは水鏡の想像は想像に止まつて、元二に去る思はしい事がありはしまい。けれども、注意すべきは注意して、萬一の破綻を防がねばならない。それにしても、元二は何處に行つて居るのか。夕飯には帰宅すべき筈であるのに、夜に入つても尙ほ其事の無いのはと、茶の間に權二が自分の事に就いて話して居るのさへ忘れて、偏へに元二が行先を氣遣つて居た。

「紫瘦君も君が想像して居る様な事を云つてるのか。」

「無論然様なんです。ですから、先生一層煩悶して、筆なんぞ執る氣になれないんです

よ。」

「どうも。」と、勝彌は腕を組みだ。

「僕は唯、奥さんと元二君が會合されるだけで、其以上に何も無いと信じてるんですが、先生は然様は思つて居られない様でしてな、其爲に一層煩悶して居られる様に思はれるんですよ。」

「どうかねえ。兎に角聞捨てにされない事だ。僕も注意しようから、君も充分注意を爲て呉れてね、何か見定めた事でもあつたら、直ぐに報告して呉れたまへ。いゝかね、頼んで置くよ。君は紫瘦君の爲に、僕は元二君の爲に、出来るだけの事をせんやアならないと思ふから、君充分注意して居て呉れたまへよ。」

「僕も充分注意します。」

「何卒頼むよ。」

二人の談話中に、茶の間と隔の唐紙を手荒く開けて入つて來たのは權二で、怒氣を含んだ眼で睨据る様に勝彌を見ながら坐つた。

「久能木君、人を馬鹿にするのも大概に爲るが可い。」

「なに、如何したと云ふのか。」

勝彌が見返した顔を、権二は憎くさうに睨んだ。

「如何したも斯したもない、既に協議の済んでる事を、態と知らない顔を爲て、僕に耻辱を與へると云ふ事があるか。失敬極る。」

「は、ア、何ですな、久能木先生と美都子さんの約婚は既に成立ッてる譯なんですか。は、は。」と、水鏡は馬鹿くしさうに笑ふ。

権二は一層躍起となつた。

「久能木君、それなら其と何故云はなかつたのだ。君は何だ、君は僕を嘲弄する爲に、」

「そんな事は無い。」と、勝彌は権二の語を遮つて、「僕が御祖母さんに僕の意を漏して置いた事は事實だ。併し、一家の人々が承諾されたか如何かは、未だ返辭を聞いて居なかつたんだ。今君が云つた事が——既に協議が済んでると云ふ、其の済んでると云ふ事が柏木家の承諾を得てると云ふ事を意味するのなら、僕は君の其語に依つて、初めて確とした承諾

の答を得たと云つて可いんだ。君、眞箇然様なんだよ。僕は君が僕の爲に盡力して遣ると云ふから、君の意に随つたまでなんだ。君が盡力して呉れたら、一層圓滿に事が運ぶだらうと思つたから、君の好意に随つた迄なんだ。僕に君を嘲弄するなぞと、そんな悪意があるものかね。僕は其様男ぢやないよ。今になれば君の力を借りる様な——君の好意に随つたのであるが——其様事を爲さないで、靜かに御祖母さんの返辭を待つてた方が可かつただね。兎に角僕に悪意の無かつた事は事實なんだよ。君、何卒誤解しない様に爲て呉れたまへ。」

勝彌は辯解しては見たもの、多少知りつゝ嘲弄した嫌が無いでもないもので、何となく充分意を盡す事が出来ない様で、心の底に羞しい様な氣もしたのだ。

「辯解は如何でも出来るものさ。君ばかりぢやアない、此家の婆さんが第一失敬なんだ。

小川君、僕は歸るよ。君は居るなら居たまへ。」

権二は勝彌には會釋もせず、はや支關へ出て行つた。

「待ちたまへ、僕も辭去るから。先生、失敬しました。」

水鏡も権二の跡を追うて辭し去つた。

「美都子さん、く。」

勝彌は美都子を呼び、座敷へ入つて來た其顔を凝乎と見て、

「今少し此方へ來て下さい。」

「はい。」と、美都子は勝彌の顔を見ながら瞞寄る。

勝彌は何時になき小聲で、

「元二君は何處へ行つたか、貴女は知らないんですか。」

「はい。」

「もう九時近いんでせう。」

「えへ。」

「何處へ行つてるんでせうね。貴女に心當は無いですか。」

「何とも云はないで御出掛けでしたから、」

「青年が夜遊するのは不良いんだから、」と、勝彌は暫時考へて居たが、「頃日ちよいく

單身で御出掛の事があるやうですね。」

「えへ。」

「何處へ行くんでせうねえ。今夜の様に遅くなつた事は一度も無かつたけれども、」と、また考へて居る。

「何か兄へ御用で居らつしやいますの。」

「いや用は無いです……もう歸られる時分でせう。私にお茶を一つ下さい。」

美都子が茶の間へ行く途端に、表の格子戸が開いた。

「兄さんですか。」と、美都子が聲を掛けた。

「さうだ。」と、答へたのは元二で、座敷には入らずに茶の間へ行つた。

「兄さん、先生がお待ちなすつてよ。」

「さうかい。つい遅くなつちやつた。」

「お前御飯は。」と、お瀧が聞いた。

「御馳走になつて來た。」

「何處でかね。」

「え、なに、友人の處で。」

「兄さん、先生が待つてらしつてよ。」

勝彌は元二が座敷に入つて來た顔を見ると、思倣しの所爲かきまりが悪るさうだ。

「元二君、大分遅かつたね。」

「えへ。と、もじくして居る。」

「何處へ行つてたかね。」

「何處へつて事は無いんです、方々ぶらついて來たんです。」

「さうかね。方々つて。」

「麴町の方から芝の方を方々歩いて來たんです。」

「富士見町へは行なかつたかね。」

「さへ。」

「さうかね。太田の妻君に逢ひはしなかつたらうね。」

「いへ、いへ」とは云つたが、顔がさつと赧くなつた。

「さうかね。」

勝彌も暫時無言で居た。

美都子が茶を持つて來て、勝彌に進めて退くと、勝彌は一口飲んで低聲になり、

「元二君、もつと僕の傍に來たまへ、少し話があるから。」

「はい。」と、いつもの通自分の机の前に坐つて、勝彌の方を向いた。

「君、頃日ちよいと太田の妻君に逢やアせんかね。」

「え……途中で逢つた事があります。」

「さうかね。」と、屹度元二の顔を見て、「今日も君は逢つた筈だが……私に隠す事は無い筈

だと思ふが、君如何だね。」

元二ははつと思つた體で垂頭した。

「君は何所返辭を爲ないんだ。如何だ、今日も都根子さんに逢つてたらう。君隠したつて駄目だぞ。」

勝彌に疊掛けて斯う云はれて、元二は暫時は垂頭いたまへて居たが、應て尙は垂頭いたまへて、

「済みませんでした。」

「それ見たまへ、逢つて居たぢやアないか。君は何故僕に隠すのか。」

「太田の奥さんが、久能木先生には内證にして居る様にして仰有つたからです。」

「都根子さんが其様事を云つたのか。」と、勝彌は疑乎と考へて居たが、「此様事を云ふのは皮肉過ぎるかも知れないが、元二君、君は都根子さんと逢つたのは人に隠すべき事、人に話も出来ない、兄弟同様にしている僕にも話が出来ない事だと思つて居るのかね。」

「いゝえ、僕は然様は思はないのです。僕は先生に御話爲ても構はないと思つてたんですが、何故ですか、太田の奥さんがお話爲ないか可いッて仰有るもんですから。」

「それで話さなかつたと云ふのは解つてる。併し、都根子さんは何故僕に隠して置きたいのか、僕に知られたくないのか、君は其を如何考へたかね。」

「え、元二ははたと答に塞つたが、思つたまへを云ふより外は無いと思ふらしい様子

で、「僕は其様事を深く考へて居ませんでした。奥さんが然様お云ひですから然様爲て居ただけなんです。先生、僕は先生に御話爲ても構はない、最初ッから思つて居るんですから、話せと仰有れば今でも御話しても可いんです。」

「然様か。君は心に疚しい事は無いと云ふんだな。」

「へい、然様です。」

「然様か。」と、勝彌の顔色は和らぎ、「併し、君は其時、都根子さんが僕には話さないが可いと云つた時に、何故久能木に隠さなきやアならないのか、何故此様事を云ふのかと、君は其時考へなきやアならないんだよ。ね、然様だらう。君は僕に話しても構はないと思つてるのに、一方で其様事を云ふんだもの、何故此様事を云ふんだらうッて、君が其處に疑念を起さんさやアならないぢやアないかね。僕は君が其時、確かに疑念を發したに違ひないと思ふんだよ。それとも君は何とも思はなかつたかね。」

「……。」

「君は何故返辭を爲さないのか。爲なければ爲ないで可いが、今日は何處で都根子さんに逢

つたかね。」

「十二社に連れてかれたんです。」

「今まで十二社に居たのかね、夜になつてまで。」

「えい。」

「然様か。」と、勝彌はまた暫時考へて居たが、「もう此上詮索する事は止さう。併し、君に云つて置くが、都根子さんは太田と云ふ夫を有つて居る人、而も頃日は夫に對つて妻たるの義務を忘れて居る人と云ふ事を、君は確と思つてなきアならないよ。僕は君の爲に、君と都根子さんと密會……密會と云つたら語弊があるかも知らんが、兎に角君が都根子さんと會合する事を禁するよ、いゝかい。併し、君は僕の忠告を用ゐんきやア用ゐんで可い。其時は僕にも亦手段がある。君、自分の前途を思ひたまへ。品性と云ふ事を考へたまへ。可いか、君。」

元二は垂頭いたまへ、態度に領承の意を示したのみで、聲を出し得なかつた。

(四三)

美都子を妻に貰ひ受ける事にした上は、何時まで柏木に同居して居るでもあるまひ。何か差當の調金と、今後の収入の工風をせねばならぬ。それには、やはり筆を執るより外は無いが、それも紫瘦なその名を借る様な不名譽な事は斷じて爲たくない。それを爲さないとならば、差當如何爲ようとの手段も無いのである。何處か雜誌社か、新聞社にでも入る事に爲ようか。それとても手邊が無ければ、其門をくいる事さへ爲し難い。いや、やはり小説の筆を執るより外爲方が無い。今後は決して紫瘦なその名は借りない。賣れないでも可い。賣れるまで剛情を張通して、飯が食へなければ餓死する分の事だ。けれども、美都子に迄其苦痛を分たせるのは氣の毒だ。美都子は何様苦境に處しても、決して耐へ得ない様な女ではないと信ずる。乃公と喜愛を共にして、如何なる場合にも女々しい振舞を爲る女でないと思ふ。それこそ、それを其苦境に置かない様にするのが、夫たる乃公の義務であるのだ。

止むを得ない場合には一時の苦痛を分たせる事は、或ひは恕されるかも知れないけれども、其様な場合に置かない様にするのが乃公の職務だ。乃公は今差當つて的は無いまでも、一日も早く一篇の稿を脱して置いて、美都子と同棲する心構を為なければならぬ。それに、今日からでも直に稿を起す事にして、一氣呵成に一篇を成し得るのも妙だ。いづれにしても、乃公は奮闘せねばならぬ。如何なる苦境にも奮闘を續けて、最後の勝利を得ねばならぬ。これが乃公の主義なんだ。よし、大いに奮つて一篇の創作を成し得て、美都子と楽しい家庭を作らう。よろしく直ちに筆を執つて紙に臨むべしだ。

勝彌は血も躍るばかり熱しながら机に對つたが、さて何を書かうと疑乎と考へると、直ぐに筆を着くべき趣向が浮ばなかつた。切角取上げた筆を投出した。

「此様事で作が出来るものか。もつと冷静になつて、充分考へた上でなければ……併し、何を書いて見ようか知ら。」

勝彌は暫時考へて居たが、種々の雑念が腦裏に往來して、さて此はと纏つて書くべきものは思ひ浮ばぬ。

「元二は今日も亦何處か行つたと見えるな。先刻から姿を見せないが……彼男も困つたものだ……美都子さん、く。」

「はい」と、美都子が入つて来た。

「兄さんは何處へか行つたんですか。」

「一寸通に筆を買ひに行つて来るからツて出掛けました。」

「通まで筆を買ひに……ちやア、もう、歸つて見えるでせう。私に茶を下さい。」

「はう。」

美都子は茶の間へ行つた。

「通には氣に入つた筆が無かつたから、また神田まで行つて来たなんて、遅く歸つて来るかも知れない。彼男も實に好人物だけれども、どうも意志が弱くつて不可い……都根子見たいな女は云ふに足りないけれども、彼女も妙な方に踏違へて了つて、考ると氣の毒でならない。けれども、彼様女の爲に、元二を誤らせる様な事は爲せたくない。元二が歸つて来たら充分戒しめて、都根子と會合する事だけは断じて思止まらせねばならぬ。紫瘦と乃公の

交誼の上から云つても、元二を都根子に近かせぬ様にするのが乃公の務だ。併し、眞逆に不潔な交際を爲て居る様な事もあるまいが、自然其様關係でも結ばれる様になつては大事故だ。今日は充分戒めて遣らねば……。」

美都子が茶を持つて来て進めたので、勝彌は一唾喫んで、

「少し話して居ても可いだらう。」

「えへ。』と、美都子は腰を落して坐つた。

「僕も家を有つ事に爲ようと思ふが、貴女は何邊が好きかね。山の手かね、それとも下町の方が好いかね。』

勝彌の此問が突然だつたので、美都子は早速に返辭も爲しかねた。暫時してから、

「私何處だつて好う御座ますは。下町は便利は好う御座んすけれども、御勉強なさるのには、山の手が静ですはね。』

「さう。僕は山の手も、成るべく邊鄙なところ、原宿か大久保邊に住みたいと思つてるんだ。彼様淋しい處は、貴女可厭だらうね。』

「さう。先づ二人です。それに小女位は使ひたいと思つてるんだが、貴女は小女と二人で遣れるかね。』

「やれない事はありませんけれども、』と、何か意味ありさうに話を斷つたが、聽て聲で、

「貴方が御留守の時なんか……御祖母さまでも一緒ですと、小女なんか無くつたつて能う御座んすけれども……。」と、尙ほ後を云ひたさうに見えながら口を噤んだ。

勝彌は美都子が祖母の千代乃と別れるのを厭うて、斯う云ふのであらうと早くも察し、今日までの祖母との關係なり情誼なりからは無理もない事で、祖母と共に在らせて、其心を休めて遣るのも、若き妻に對する夫の務かも知れぬ。御祖母さんが一人殖えたからと云つて、二人で暮せるものが息を突くと云ふ事もあるまい。美都子の爲に然様と覺悟して、彼に安心させて遣る事にしようと思つた。

「御祖母さんは無論御一緒願ふ意なんだから、貴女が心配する事は無いさ。』

美都子は心から嬉さうな笑を浮めた。

「然様爲て戴けば、私女中なんか入りませんは。」

「さうも行くまいけれど、生活の苦痛は今から覺悟して居て貰ひたいのです。貴女が知つてる通り、僕は筆に衣食してるので、他に生活の道は知らないし、無論財産なんかありやせんのだから、生活の困難は免れないものだ位、覺悟して貰はんきやアならないよ。」

「其様事は、何様にでも辛棒しますは。」

「其位な事だなんて、其様に軽く見て居ても困るね。」

「ですけども、私何ですは、此まで随分困難な境涯を経て來ましたもの。」

「さうかも知れないけれども、其様に軽く見ないで、大なる決心を以つて、其困難と闘ふだけの覺悟が必要なんだ。僕は無論奮闘する、力の限奮闘して、祖母さんや貴女に苦難を見せない様に勉はするがね、併し僕は未だ微力なんだから、貴女に其だけの覺悟は豫て有つて居て欲しいんだよ。」

「私何様困難にでも耐へて見せますは。」

「貴女が其覺悟で居て呉れれば僕は幸福だ。」

二人の話は斷れた。暫時して美都子が、

「何時頃お家を御有らなさいますの。」

「さア、何時頃と云ふ事は今確と云へないが、僕が一篇の小説を脱稿して、其稿料が手に入るのと直ぐ、其手續に取掛る意なんです。此様事を云ふと、餘り突然として居て、如何にも存氣らしいが、今日直ぐに稿を起す意で、机の上を御覽なさい、既に墨まで磨つてたぞいなんだ。」

美都子は頼ありさうに嬉しげな笑を浮めた。

「僕が貴女と別に住む事になつたら、元二君は如何するだらうね。」

「兄さんは一緒に來たがりますは、屹度。」

「然様かも知れない。來るなら來て居ても可いさ。兎に角一日も早く原稿を書上げて、家を有つ工風を爲なきやアならない。金が手に入つたら、直ぐに家を探しに出掛けるんだね。牛込から小石川の方が、それでなければ青山か麻布か、成るべく閑靜な處を探す事に爲よ